

常磐松文庫蔵 『九条家本源氏物語聞書』 翻刻(一)

渡 邊 道 子  
徳 岡 涼

写本。一帙五冊。全一筆。外題・内題共に見えない。帙題簽及び各巻々頭の「九条」朱方印より仮にこう称しておく。

帙

宝相華文様古代裂。上蓋左上部に「九条家本／源氏物語聞書

中院通勝講  
慶長元和頃写 五冊

」と墨書された題簽（一八・六×三

・八厘）を、右脇の上部に「源氏物語聞書」と墨書された題簽（一八・五×三・〇厘）をそれぞれ貼付。この

帙並びに帙題簽は、弘文荘による後補。

寸法

各冊共に二八・〇×一一・二厘。

行数

各冊每半葉一行二八字前後。

装訂

袋綴。二・三・四・五冊目は縹色糸で綴じられているが、一冊目のみは丁子色糸。後補か。

料紙

楮紙。全冊に、途中で紙を継いで一丁としたものが混在する。

表紙

鳥の子（表縹色、裏香色）。題簽、印記等はない。又、見返し部分は端のみ折り返し、見返し紙を貼り付けた

もので、上下の折り返しはなく、さらに見返しの虫喰いは表紙に一致しない、後装か。

内題・跋文・奥書・識語、何れも無し。

印記 各冊共に、巻頭に「九条」の朱方印、末尾に「月明荘」の朱長方印を捺す。

又、次の各冊に左の記載がある。

慶長九閏八月二日於水無殿瀬 素然（第一冊 61オ）

元龜三九月勝竜寺之城にて藤孝御所望にて紹巴講尺アリ／末座にて聴聞（第二冊 79オ）

慶長十三申戌二月廿三於水無瀬殿 中院殿也足軒御／講尺 此巻より讀ハしめ給ふ心ハ此巻ハ祝言也桐壺ハ／不祝言なり此ゆへに此巻を初ニヨミ給り先に芦笋／斎ニいさゝか聴今ノ説ニおなし不祝言ノきりつほを最初ニ書／たるも心を付てみるへき事と心前申されけり（第三冊 13オ）

慶長十三四月十九日ニ御講釈終先年称名院殿の御／講釈も今日終と御物語也 今日石山の御縁日ニよりて也（第五

冊 88オ）

各冊に収められている巻々及び各冊の丁数は次の通り。

第一冊 「桐壺」ゝ「葵」。全一〇二丁。

第二冊 「賢木」ゝ「胡蝶」。全九九丁。

第三冊 「蛩」ゝ「鈴虫」。全一〇四丁。本来二冊目に収むべき「初音」巻を、この冊「篝火」巻の次に収む。

第四冊 「夕霧」ゝ「竹河」。全三九丁。

第五冊 「橋姫」ゝ「夢浮橋」。全九一丁。

以下、次の凡例に従って翻刻したものを掲載することとする。

## 凡 例

一、本翻刻は、本学常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』（五冊）のうち、第一冊目の「桐壺」・「葵」について、可能な限り原本の様態を復元し得るように翻字することを目的とする。

二、右の目的を果たすために、翻刻の際には次の基準を設けた。

1、改行は原本に従う。半丁毎に「」印を付してその下の（ ）印内に、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付記する。但し表紙・見返し・前遊紙の場合は、その旨を「」印下の（ ）印内に記載し、丁数には含めない。

2、本文・書き入れ注共に全て原本に忠実に翻字した。猶、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。

3、一応現行の字体に翻刻するが、異体字を残したところもある。又、意識して片仮名表記がなされていると思われる部分に関しては、片仮名表記を残すこととした。

4、見せ消、合点、濁点その他の諸記号は、可能な限り、原態に即して表記することを原則とした。また頭注・傍注・脚注等の書入れが二行以上にわたっても、そのまま忠実に再現する。

5、紙片貼付の箇所に□印、また注記・補記すべき箇所については□印を用い、下の欄外にその旨を記した。

三、各巻の礎稿の担当は次の通りであるが、校正に当って、上野英子、葛原由可、松原啓子の諸氏の御協力をえた。記して謝する。

料簡 桐壺・夕顔・花宴・葵（徳岡涼）

帚木・空蟬・若紫・未摘花・紅葉賀（渡邊道子）

(外題なし)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

此物語の書やう三ツノ品也内篇ダイシムスルモノ外篇ソノタテマ雑篇と云内篇と云は  
箒木など也是は一段聞にくし雑篇と云は字治となり

是は聞よし莊子ノかき様も此三也

式部か父書たるといふ説既ニ花鳥などにも載られたれと其も  
入さる事也只式部か書たると見へし

桐壺ノ帝と申は延喜ニ比して書たりされとも押出して延喜と  
云事はいかゞ只桐壺ノ帝ニして置へし朱雀院は既ニ御名をあら  
はすうへは朱雀院也其不審王代記ハ延喜朱雀村

上冷泉圓融也是を此物語ノ系図ニあてゝみれば村上なし如何素

然御答よくこそ不審申人昔も今も左様ニ云人ありされ共其は

此物語の奥義を能知さる人也当流さ様ノ事には強てか  
す此物語つくりものかたりなれハ虚もあり実もあり王代

記ニハ相違の事もあり唯此物語の系図の如ニ見て置へし

強て沙汰して無益の事也私思伊勢物語の奥書ニ上古之人

強不可尋其作者只可翫詞花言葉而已如此黃門書給ヘリ是等  
と一意欵此不審申候時氏成も  
同條にて御聞候梅かゝを桜の花に匂はせて柳か

枝にさかせてもみんと云古歌此源氏ニ相叶ヘリ万事ニ付て十分なる  
事は無物也此源氏美男好色は業平を取り左迂流罪は菅丞相

行平を取栄花は左大臣融公を取大唐周公の夏なとまで様々の事を

(表紙)

(見返し)

(前遊紙オ)

(前遊紙ウ)

(1オ)

第一丁右肩ニ「九条」(單郭朱方  
印、右下隅ニ「実踐女子大学  
書館」(單郭朱長門印)ヲ捺ス。  
以下、合点ハ全テ朱筆。

約五字分ノ空白アリ。



取あつめ才藝等もよき事をあつめて源氏と云人をつくり立たり  
さるによりて聊もなき身ニはあらず先代ニ有つる事を曳懇／＼作り

たり 又源氏と云夏有夏にも非す無事にも非すこゝを以  
有門空門非有非空門亦有亦空門といふ天台四諦ノ法フツと同意  
と也源の御身上に限す此物語の作りさま凡此のことし

御ミ所ミよりて読ミ御と読ミて聞ミよき所はミとよみ御ミと読ミて  
聞ミよき所をはおゝんと読ミへし余同之定まりて定まらず

河海の作者惟良とあるは惟光と良清との兩人をかたとりて

の作り名也真実は順徳院の御孫の四辻の親王 花鳥は一条ノ

大閼御作也河海の上に誤あるをなをし給へり 簀花は牡丹花の

御作也宗祇への。書なり花鳥ノあやまりを又簀花になをし給也三

抄の内初て書出給ふ事なれば河海奇特と也後々のは前を見／＼して

書給へし

「  
(2才)」

此物語今ノ世ニ用ル 処宗祇よりの伝也然ハ祇の師。は志多良ト云人

なり是は武家の御所の奉公衆と承及如何祇この物語の中興

と見えたり

紫式部は上東門院の女房也 女房とは女房達の事也

この物語寛弘に始て康和の末ニ流布スその間蜜せり 寛弘元  
ヨリ康和

元まで九十六年歟

源の姓は嵯峨ノ天皇の御時ニ始まる也字意は水の源也 岷江始濫

觴入楚無底此語の心也かくのことく末盤昌と祝する心也この姓は

左大臣融公始めなるへし

須麻卷より書はしめたり此事は猶古抄ニ委し略之

「門」ヲ捺リ消シ「文」トスル

式部か住所は正新町ニあり又墓は雲林院の内白寺ニ又天台の檀那院ノ血脉に入たる人也 心前説

河内本と云は河内守光行の本也是はかき表紙也その子ニ親行といふあり此河内本の末本世間に多々あり 俊成の御本は黄表帋也定家の御本は浅黄表紙なり当流ニ用ル所この本也俊成定家の間ニも少シツムの替りあれとも大かたはおなし

初巻桐壺ニ祝言をハ書すして哀傷を書る事眼の付へき事也惣テ物の心にしみておもしろき事は祝の上にはなき物也一ツハ又此ころなり

式部か祖父は唐ノ中納言父は越前守為時女は大式三位夫は左衛門権介也名乗は信孝と云々是大式三位か父也三位はさ衣の作者也百人一首ニも定家卿入給りよき哥人なり

此草子よく莊子ニ似たり莊子ノ寓言といふ事あり寓言ノ二字を根無草と読り此。かくのこくみるへき也 草子も 又天台六十巻を表

せり此草子六十帖とは云とも五十四帖也天台も如此欵如何猶人ニ尋へし  
(一行空白)

朱雀院冷泉院と申此両院は何れの帝にてもあれ院ニなり給ヒての通称也

王代記ニ醍醐天皇トあるは延喜帝也此物語に桐壺御門とある是ニ当れり代記ニ朱雀院ト申は天慶御門也代記ニ村上天皇と申は。此物語にて冷泉院也代記ニ冷泉院とあるは物語にて今上なるへし又春宮と物語ニ書たる円融院欵 口ニ書申候不審其分ニテモ一往は済候ヘル今こゝに注する処能ハ聞え申し候 冷泉院とある系図の朱引心を付て見

(2ウ)

□部分、当該箇所貼付ノ紙片ニテコレヲ補ウ。本行ハ白紙。以下同様。

(3オ)

□部分付箋ニテ補ウ

へし少口決あり

ㄥ (3ウ)

／＼一世の源氏二世の源氏三世の源氏と云事あり帝より直ニ給  
たるを一世といふ其子を二世と云其孫を三世と云々何れノ姓も  
定て是ニ准すへし

／＼三光院殿仰らる源氏は悉クふまへのある事也かり初の夏もふ  
まへのある事なるへし見手ニよりて種々ノ事を見出すへしみる人  
の眼力よはき故に式部か心底ヲよく知さる也其時は清少納言  
その外物しりともあまた有しほとにふまへのなき聊余なる  
事はいさゝかもえかくましき也

／＼桐壺は不祝言ノ卷也はつねは一段と祝言ノ卷なりされは講尺の  
時は先はつねを讀始給へり其後きりつほをよみ給也

ㄥ (4オ)

更衣 天子ノ御衣取改役也内侍ヨリハ上也

内侍ハ女中ノ惣名

(白紙)

ㄥ (4ウ)

桐壺

いつれの御時にか 色／＼古説あれ共如何作物語なれは

その御門とあらはし給と云事いかゝ

さとかちに 御煩しけくして御里ニのみおはしけり

かたしけなき御心はへ 御門のみ心はへ也

女御更衣 女御と云事唐と日本とことの外ノ相違也大唐は

めし仕はるゝ中にも下々<sup>シタ</sup>の者を女御と云り 更衣と云事は漢ノ

武帝ニ始ル 桐つほの帝の御時女御三人更衣二人后三人

□部分、付箋。但シ本行トハ別  
筆力。

なり本は更衣十二人ある事也是ほとなくともくるし  
からぬ物なり天子ニ物をめさする役人也御息所と云も同じ事也  
更衣を御息所と書るところもあり

親うちぐし 具

御心ばへ はもし濁ル

御かたち

一のみこ 朱雀院なり

をしなへての 更衣たちの事也

上ずめかし 上臈しい事也

人よりさきに 弘微殿の御事也

心くるしう 御門の六かしく思召也

きすをもとめ 毛を吹てきすを求るの心也

御つほねは

うちはしわた殿 うちはしは板なと橋に打わたす也わたのとは

廊ノ事也

まさなき事 正躰なき事也

めだう 馬道ト書ク御縁の更也

世話ニメンラウト云

後涼殿にもとよりさふらひ給ふ更衣のさうしを外にうつさせ給て

うへ局給はす 余の更衣をほかへやりて此人ヲ御ほと近ク住さ

しめ給り給はすノすもし清へし給はるといふ事也

みやす所はかなきこゝちに きり壺の更衣也こゝにては御息所ト

かきたり更衣御息所おなし物なり

五六日 いつかむゆかと読へし

「(5才)」

「(5ウ)」

「の」ニ「を」ト重ネ書キ。

輦 牛をかけぬもの也 河海ニ委し

みる／＼猶おはするものとおもふがいかひなければ かもし瀧へし

今はなき人とひたふるにおもひなりなんとさかしうの給ひ

つれと さはあるましいと人／＼申き

なくてそとは ある時はありのすさひにの哥ノ心也河海ニ委し

御あそひ

門引いるより 車の夏也

月かけはかりそ八重葎にもさはらす 問人もなきやと

なれとくる春はの哥を引給へり春を月にかへて書たり

面白し

くれまとふ心のやみ 人の親のこゝろはやみにの哥を引

御心さし

かへりてつらくなむ 却て御門を恨み奉る也心ノやみにま

とふ故也

のりやらす 車の事也

でうど

すが／＼ 早／＼の事也

つぼせんさい 此卷ノ名をつぼせんさいとも云は此詞ニ依て也

枕ことに こもし濁ル枕言也 朝夕のもてあそひものなり

夜ふくるまであそひをそし給 御妬み故ニなり

かたはらいたし わらと読也

月も入ぬ 三昧詩 五天到日以應白月落長安半夜鐘 是ヲ引

大床子 おもてむきの御膳也 あさかれると云は内ノ御膳なり

さゝめき

┌ (6才)

下字ヲ擦リ消シタ上ニ書ク。

┌ (6ウ)

「ジ」ニ「ウジ」ト重テ書キ。

かの御を<sup>は</sup> 源氏御を<sup>は</sup>也を<sup>は</sup>とは祖母<sup>ウバ</sup>の事也常ニ云ニハ替ル返<sup>く</sup>

女みこたち二ところ 弘徽殿の御腹なり

今よりなまめかしうはつかしけにおはすれば 源氏の御事也

わざとの御学もん あそはさて叶さる学問の事也

うたて成ぬへき うそに成ぬへき也あまりの事にて人のうそに

おもはんとの義也

こまうど 高麗人なりむかしは高麗人も日本の官に成

鴻臚館 大唐ニもある事也それへ鴻臚寺と云り此鳥は唐ニも

日本ニも通する鳥也仍かやうニ名付る也河海ニ委

右大弁の子のやうにおもはせて 弁は文字ノ達者をいふ博士也

ゐてたてまつる 将也<sup>ヒキル</sup>也

さえ 才なり

いひかはしたはる事とも 前ニさうし申つる事共なり

かへりさりなんとするに 相人の帰り去んとする也

みこもいとあはれなる句を作り給るを 源氏絶句を作給ふ歟

やまとさうをおほせて 仰の字ニあらず課の字也仰付られての

心ならは<sup>ケ</sup>大和相にと有へし只源氏を相<sup>サ</sup>申<sup>ス</sup>也日本ノ相人也

外尺<sup>ケサシ</sup> おとり腹の事也 外戚

きはことに 涯殊

先帝<sup>ダイ</sup>の四ノ宮 薄雲ノ女院なり先帝誰ともなし但光孝天

皇なるへし云々 帝<sup>ダイ</sup>とは読まし

「(7才)」

「(7ウ)」

御かたち

きさいの宮 四宮なり

うけはりて かんしたる事也 勿論と云心也

御あたりさりと給ぬを 源氏父みかとのそはを去給ぬ也

なめし 無礼の事也

にけなからず にくみがたき也

そはくしき 御中あしき事也

世はたくひなしと 桐壺の帝の御心にかくおほし召也

猶にほはしさは 源の御事なり

御おほえ

ゐたち 立居也

南殿 紫晨殿なり

こくさうゐん 米穀を納むる院也

殿のひんかし 清へし

くはんざの御座 元服の人の座し給ふ椅子也

曳いれの大臣 冠をきせまいらする人也 平人のゑはし親と

云物なり髪を冠に引入らるゝよりて引入の大臣とは申也 様々六かし

き作法ともありとそ

みつら

御やすみ所に

なみたをとおし給 色／＼の義理あれとも更衣の事を思し

出ての事なるへし

きひは きびわと読へしひはくしき心也

あけをとり 髪をあけて後ニ先よりもをとりたる事也

「(8才)

「(8ウ)

8丁ノ折山付近デ紙ヲ継グ。料紙ハ同ジ。

コデ紙ヲ継ギ「みつら」「き作法」ノ部分ハ、糊付シタ継目ノ上ニ書ク。

御けしき

さふらひにまかて給て

殿上ある事也

御座のすゑに源氏つき給へり

かやうニは有ましき事也

うへの命婦 女なり

結ひつる心も—— 大臣の返哥也 あせすは物のあしく成

事をあすると云也

ふたう 舞踏 爵を以て帝ニ向奉て礼をし給ふ事也

おりひつ おりひつと読給り

としき 屯食下臈のくい物也

ゆゝしくうつくしと—— 大臣ノ心にかくおもひ給へり

女君 葵上なり

右のおとゝ 延喜の御代までは摂政なし左大臣右大臣まで也

藏人の少将 是ハ頭中将也

おゝいとのお君 葵上なり

うちずみ 大裏ノ住ぬ也

おほな／＼ 懇なり

御心に付へき—— 源氏の御心に合やうニ色／＼ニせさせ

修理職 すりしきと読給り 給へり

になう 二無 ふたつもなくなり

池の心 池の鉢ども也

光君といふ名は——とそ——なむ 二所にて人の云たる

様ニ書り此草子ニ此筆勢あまたあり吾書たると見せぬ也

追

「(9オ)

「(9ウ)

「(10オ)

下字ヲ擦リ消シタ上ニ「代」。



しけく渡らせ給ふ—— 女御更衣たちなるへし常／＼の

事なれば源氏をえ恥たまはぬとなり

亭子院のかゝせ給ひて 寛平也

いふせさ 心もとなさ也

あらまほしき御あはひ—— 思ひのまゝなる御間也

あさましき 善にても悪にても勝れて云詞也

まみ 目つきのさま也

はか／＼しい はつきとしたる心也はか／＼しからぬとははつき

ともなきなり

おものな／＼といとはるかに 御膳<sup>ヲモ</sup>

こよなう 事ノ外也

しけいさ 桐壺なり 殿の名也<sup>局</sup>

さとのとの 後に二条也院なり

坊にもようせすは よくせすは也 能の字たるへき歟

すくよう 宿耀經也 トの書<sup>ウラ</sup>

結つる——こき紫の色しあせすは 此哥ノこきむらさきの

と有事紫ノ糸をもてもとゆひをとる事なれば也又は紫

を女ニ比するものなればなり

あしき御もてなしゆへにこそ—— 帝の御もてなし也御

寵愛の故ニ有ましき事もあるをかく云也

先帝ノ四宮 系図をみれば二の宮也不審但后腹の四宮<sup>系図ニ</sup>ありかくの如<sup>ク</sup>

ありても先帝ノ四宮とある事不審也素然ニ尋申しめつれ共不

審不決兄にても姉にても二人后腹ニ猶おはしける歟如何それを

（11オ）

（10ウ）

系図ニ略して書ぬ欵達者ニ已後可問

(白紙)

「(11ウ)

簾木

此卷は哥を以て名とせりあるにもあす消るはきこの心  
四帖五帖ニ遍する也 此卷を桐つほの并と云説あれ共惡説也  
ありとはみえて逢ぬ君かな法華二卷譬喩品ニ似たり末ニある  
品さための所猶心法花を似せて書

(以下二行分空白)

名のみことくしういひけたれ給ふ いかめしういはれ又

一かたには云給す也 論語曰子貢問曰郷人皆好之何如子曰未可  
也郷人皆惡之何如子曰未可也不如郷人之善者好之其不

善 惡者惡之也 此説を引給へり万人にほめらるゝ事は

「(12オ)

なきもの也

とかおほかなる

なよひかに 心やはらかによはきを云り

かるひたる ひもし濁ル 好色の事也

かくろへこと 弄花ニくわし

かたのゝ少将 作り人也好色人なり源氏は下は好色なれとも

上ニは実を立給り此少将は上下好色を立るとそ

さふらひよふし給て 御座ありようし給てと云事也

おゝいとの 左大臣との也御しうとなり

しのふのみたれ—— 葵上の御方人の云る心也

下文ヲ擦リ消シタ上ニ書ク。

ほん<sup>ゑ</sup>上 本性<sup>ゑ</sup>なり 上と書もくるしからす假名<sup>ゑ</sup>ものなれはのかれ  
あり

な<sup>ゑ</sup>か雨 三月以上を霖<sup>ナカメ</sup>と云

うちの御物<sup>ゑ</sup>いみ

な<sup>ゑ</sup>かゐ 長居也

なにくれ 何かなり

宮はらの中將 左大臣殿の御息頭中將なり

かしこまりもをかす 無礼の事也品定の序分也

ゆかしかれは

殿上にもをさく人すくなに 今夜は人少なしと也

御とのゐ所 きりつほ也

例よりは 常よりはなり

おほとなあふら 檠也

をのかしゝ 古抄ニ委シ 自<sup>ゑ</sup>恣

えんすれば 怨の字なるへし怨は浅きうらみと云字心也

おほそふ をしわたり事也大方なり

かたはしつゝみるに 是より頭中將の詞也

かくし給つ 給ふつと讀給り

女の是はしもとなん しもはやすめ字也 難

はしりかき 早筆の事

おやなと立そひ 二親なり

かたか<sup>ゑ</sup>とを 片才

うちおほ<sup>ゑ</sup>とき 穩也

はかな<sup>ゑ</sup>きすさひをも 手すさ<sup>ゑ</sup>ひ也 みと読へし

「 (12ウ)

「 (13オ)

「 (13ウ)

ゆへつきて

うめきたる

たんそくの事也歎息

いとなへてはあらねと——源しの御詞也

いとさはかりならん——頭中将の詞也

とるかたなくくちおしきゝはといふなりとおほゆはかりすくれたる

とは数ひとしくこそ侍らめ とるかたなく——是は最下

也 いうなりと——是は最上也 論語に上智下愚不

此語を引給へり

いとくまなげなる

其品／＼やいかに——源の御詞なり

くらみしかくミジカク 卑 いやしき也

なを人

けちめ 結目ゲグメ

藤式部

たつき

なりのほれとも——問答ノ時ニ学ヲ問ヘハ後の問から答ル

法也是ニよみて後ノ問から是も答たり

心は心としてことたらすわろひたる——紀有常ノ事を伊

勢物語に心うつくしうあてはかなる事をこのみて——と書り

此以叶へり

すりやうといひて 大唐ニハ高官也日本にてはさ程の官ニ非ス

人の国の事に 人のと国との間ニ句を切てよむへし其故は

つゝけてよめは異国のやうに聞ゆると也 但さなくともく

「(14オ)」

「(14ウ)」

るしかるましき事也日本の中にての他国なるへしと被仰  
なま／＼のかむたちめ なまなりなるかんたちめ也

非参議<sup>ヒサンギ</sup>

花鳥<sup>ニ</sup>委

かはらか

底きれいニさはやかなる心也

諧<sup>カハラカ</sup> 字注調ト

素然御説

はふく<sup>ハフク</sup> 省<sup>ハツク</sup> しあはする議也。羽<sup>鳥ノ</sup>をひろけておほふ心なり  
すへてにきハはしきによりなんやとて――

源ノ御詞也にき

はしきとハ富める事也

こと人のいはんやうにとて中將にくむ

頭中將の詞也余人の云

さうなる事を源氏の仰らるゝと也源をひはうせらる

ものとしな時世のおほえ打あひ――

位<sup>位</sup>種<sup>種</sup>姓<sup>姓</sup>もよく又

富貴して両方相應したる事也

なにかし及へき程ならねは

右馬頭か詞也

世にありと人にしられす――

夕かほの上などの類也

たかへる<sup>重</sup>

案に相違したる事也 伊せものかたりにふる

さとにいとほしたなくて有ければ心地まとひにけりなとある

かやうの心也是を引給へり

父の年おい物むつかしけに――

女共の父なり 但三光院殿の

御説ニハ父は式部か父せうとは藤式部なるへしと被仰とそ

いてや上のしなと思ふにたに――

源ノ御心中を察て紫式部か

かける詞也

白き御そのなよやかなるになをしはかりを――

源の御衣裳なり

なをしはかりとは重ねの衣<sup>キヌ</sup>を略したる物也

（15才）

一部虫損有。

下ニリ擦消シノ痕有。

（15ウ）

ひもなとも打すてゝ 物ニ付たるをは紐と云はなれたるをは帶と

女にて見たてまつらまほし 源を女ニなしてと云ニハ非す我身 云也

女に成てと云心也

大かたの世につけて—— 五段目也

まつりこちしるへきならねは まつりこと也

佛の十大御弟子孔子十哲も各その得たる事くあり萬事ニ

よき事のそなはるはなきもの也 曳給り

せはき家のうち たゝせはきニはあらず一家の事也中品通ス

あるし 此あるし女あるしなり

あふささるさ 往さ来さ とするもかうするもと云心也

此段花鳥ニ誤ル そへにとてとすれはかゝりかくすれはあな

いひしらすあふささるさに 引哥

されともなにか こゝにて句を切て世のありさまをと讀へし

なにがとはなにがしがと云事也下畧歟

世のありさまをみ給へあつむるまゝに心に及す——

世間にあまりの事もなき物といへり

君たちも 源氏や頭中将やなとなるへし

ところせく せはく也下畧なり 此詞のなき本もあり河内本ニは多分あり今の

代のには大略ありと素然仰らる如何馬頭か身上して云義も

され共悪し花鳥ニ誤ル高人ノ上ハ大夏也結句所せはきと云り あり

ちりもつかしと身をもてなし—— 宗祇云り六条の御息所 此儀よし

に似たり内は一段好色ニて外はさも見えす

ㄥ (16オ)

ㄥ (16ウ)

コノ部分デ紙ヲ継グ。

下ニ擦リ消シノ痕有。

ことえりをしすみつきほのかに—— 文章以下書さま等

文の上の事とも也 すへなくまたせ みな文のせんさく也

せんかたなきもすべくと云便りなき也

是をはしめのなん—— 第一の難なり

ことか中に あるか中ニ也

なのめなるましき人の—— をしなをしなる人にてはなき也

うしろみのかたは—— 世邊の事也馬頭なとか事ニや

みゝはさみかちに 髪を耳ニはさみたる也かひ／＼しき躰也つく

ろはぬ躰

ひびうなき 貧相なき也

さしくみ くもし清ム

こめきて—— 大やう也 巨

ひたふる 一向 永

らうたき

そハ／＼し 不和合事也かたそば也

くまなき—— 残る所もなき物いひ也

今は品にもよらし形をはさらにもいはす—— 三界唯一心

々外無別法此經文ヲ曳給リ 只こゝろか本と也

ねちけかましき 佞人也虚ヲ云て表裏ある人也詞と行跡と

相違する心也

あまりのゆへよし—— あまりとは其上也 ゆへよし二也

えんに物はちして 艶

みさほつくり つもし清濁いつれにても 夕顔上などの類也

（17オ）

下ニ擦リ消シノ痕有。

（17ウ）

ふかき山里の世はなれたる 深き山さとのと云詞ノなき本  
わらはに侍し時 馬頭か詞也 もあり

ことさらひたる事なり うはかはに作る事也

心さしふかゝらん男をゝきて—— 此あたり伊勢物語

の手をゝりてあひみし事を——の段ニ似たりと被仰けり

世にかへりみすへくもおもへらす—— 一つぎぜんの心也心浅き所也

つかふ人古こたちなと もとつかふたる人とも也

君の御心はあはれなりける物を—— 君とは夫をさして

ひたいかみをかきさぐりて 本ノ髪にてはなしさけ尼なれはひた  
云り

かみとは云也

ひそみぬかし 静まる心なり

濁りにしめる程よりも—— 荷はのにこりにしまぬ——此

哥ニハかはる心なり

心をかしやは

又なのめにうつろふかた 男のうつろふ也

おこがましかりなん をかしき心也戲笑ノ義也祇ハ前ヲ舍て

みるとそ

みる人から 女なり

かろきかたにそ—— 男を大事ニおもはぬ也

つなかぬ舟のうきたる—— 女を舟にたとへたり

親身岸額離根草論命江頭不繫舟 是を引給り

しかれとも意は少し替れり

さしあたりてはおかしともあはれとも—— 中將詞也花

ㄥ (18ウ)

ㄥ (18オ)



鳥にあやまる也

わかいもうとは——

頭中将の詞也葵上の事をおもひ給ふ

君のうちねふり

源氏の事也

ひひらきぬたり

輕粧居 打ひろげてゐたる躰也是レ

品定メの以上也

爰まで一日の講尺ト弄花にあり

木のみちのたくみ

大工ノ事にてはなし上古きの道の工みと

云物あり但又大工の事にニも有へし

墨かき—— 墨繪は色繪よりも大事ノ物也下繪事<sub>ニ</sub>にても

あるへし

おとろくしく

すくよかならぬ よはき心也 健<sub>スタヤカ</sub>

よはなれてたゞ見なし 健<sub>タカ</sub>もし清

こゝろしらいをきて 心つかひなり 心<sub>知コ、ロシイ</sub>

てんなかにはしりかき—— 點長ニ あふ坂の関のし水に

影見えて今や引らんもち月の駒 逢さかの関の岩かとふみ

ならし山立出る霧はらの駒此二首を公任卿ニ人の問ニ清水ノ

歌まさると云々引給へり

はかなきことたに—— 馬頭かこと葉也

はやうまだ<sub>いと</sub>けらうに侍し時 過にし事也 九段め也

まほ まむきなる事也 舟より始る詞也まほとは

書共まをと讀給へり

とまりにとも思ひ侍す 始終共おもはぬ心也

さう／＼しくて さひしき心そ物足はぬ也

「19才」

「19ウ」

「よ」「は」ト重ネ書キ。

押紙。

ものえんしを——物怨 物うらみ也 しつと深き女なるへし

おいらかならましかはと なたらかならましかは也

此人のために 馬頭か女ノ身ニ成て我と我を此人と云り

すゝめるかたとおもひしかと——取もち過たるかた也さし過

なよひゆき 和らき随ふ也 花鳥ノ説はあやまる たり

うとき人に 別人ニなり

こるはかりのわさして こるゝほとんどの態也

おもひ給へて

をしへたつる 花鳥の説あやまり

あひなたのみ かひなき頼也

はらたゝしく成て 馬頭か上也

にくけなる事をいびはけまし侍るに—— 猶はらを

たてさする也

およひ 小指なり 河海ノ説誤

まかてぬ

てうかく 調葉は当日二日前試葉は卅日前ニある事也

あかるゝ所にて 各立わかれたり かもし濁ル

家ちとおもはん。またなかりけり またを又と書本もあり

何れにても

なへたる衣のあつこえたる 綿のあつき夜の物也

おほいなるこに打かけて 大きな伏籠也

かたひらなと 木丁の事也

さうしきはなし 正身又は正員

┌  
(20ウ)

┌  
(20オ)

ひたやこもりに情なかりしかは 思切てゐたる躰也

直隠 ヒタヤコモリ

ありしなからはえなん見すくすましき—— もとのやうニ

ならはいやと云義也

つなひきて ひもし濁 互ニ存分たてなる事を云様なる

竜田姫—— 花鳥説は誤也 義也

さておなし比—— 馬頭かこと葉なり 十一段目也 木枯の女の事也

ゆへありと見えぬへく ぬへくとは女をつみして書り

はしりかき

みるめもこともなく侍しかは みめよき女やこともなくは無

なる儀也諸式ニわたるへしほめたる詞也

事

さかなもの

此人うせて後 ゆびくふ女也

あるうへ人 殿上人なり

大納言の家に 此大納言は誰ともしらす若は馬頭の父歟

この人のいふやう 是は同車の人なり

此女の家はたよきぬ 道のはたにある家也

池の水かけみえて月たにやとるすみかを 池の水と句を切て影

見えてと讀へし

すゝろきて 坐 ススロキテ うきそゝろく也

すのこたつ すのこのやうなる物也

あはれとけに見えたり 馬頭か心なり

つゝしりうたふ

噺 ツツリ

「(21ウ)

「(21オ)

よくなるわこん

能鳴調ト

云和琴の一名あり左様義ニ

見たるもよし又は只よくなる琴とみたるもよし何れも  
今めきたる物の聲なれば 大和琴なるによりて今めく

といへり和琴は日本にて弓絃を并へて作り出たる物也次手ニ  
也是御雑談 たゝ手ニならず弓絃なりけり言そのかみの

しらへをおもふやまと琴也是玄旨御惑と也妙句と

えならぬ たゝならぬなり

曳やとめける 引屋はとめける也

わろかめり 哥をわろく云也又は云過たると云心也

あされかゝれば されかゝる也

聲いたうつくろひて 好色人の躰

木枯に吹あはすめる笛のねを——なき うはの空なる人な

れはとゝめんやうもなきと也 ことの葉木葉と琴とを含

ませてよめり

この二つの事を思ふ給へ合するに 指くひの女とこからしの女との

御心のまゝに 源氏頭中将二人をさして申也

事也

あへかなる うつくしくひはづなる事也

すぎたはめてん たはむはよはき事也好色也

あやまちして 女の上になり

君すこしかた多みてさる事とはおほすへかめり——おはさうす

是は草子の地也 おはさうすは おはします也

中将なにかしはしれものゝ—— 頭中将の詞也しれ物とはおろか

なる人を云也

痴シモノ

ㄥ (22才)

ㄥ (22ウ)

玉さかなる人ともおもひたらず

頼わたる事なとも——此わたり花鳥ニあやまる心を付て

みるへし

侍し<sup>か</sup>

おさなきものなともありしに 是たまかつらのうへ也

なみた<sup>く</sup>みたり 頭中將なり

ことなる事もなかりきや 云残したる所一段おもしろし

山かつの——女わか身ニ比して讀り夕顔ノ上也

うらもなき物から——夕かほの上の心中

虫の音にきほへるけしき 哀さのきほへる也

咲ましる——夕顔を慰めてよめり

ちりをたになと——ちりをたにすへしとぞ思ふ咲しより

いもと我ぬる床なつの花此古哥の心也<sup>次ニ被仰植しより共あり</sup>

打はらふ——頭中將ノ本妻からおとし給へるを上にはいはず

下ニ含めるなり

やくなき 無益なり

されハかのさかなものも——十四段目也

あきたき事も——あかうする事も也

とりくしなんすへきく<sup>トリグシナン</sup>さはひませぬ——利具可難種<sup>スヘキクサワイ</sup>

くさわいと讀へし 何事も足たる人はなきものと也

くすしからん くすみたるかた也

けしきある事 けうか侍事なと云心也

┌ (23オ)

└ (23ウ)

下ニ擦り消シノ痕有。

文章生<sup>モンシヤウノシヤウ</sup>

博士の官也

此段狂言ニ書り何れの物語

にもある事也

なま／＼の博士はつかしく せう／＼はかせ也

わかふたつの道うたふをきけ 富貴人ノ女と貧家ノ人の女メ

との得失ヲあげたり 富家ノ女ハ怪<sup>アツツル</sup>ニ其夫、貧家女孝<sup>ハアリ</sup>ニ於<sup>シツトメ</sup>

姑ハ吾ハ貧家也と名のる也 猶河海花鳥ニ委し

きこえこち侍しかと こちは言也

御うしろみ

侍めれは

をのこしもしさいなきものは侍めると申せは 男は進退の

もち安きと云なり

さて／＼おかしかりける女かな 頭中ノ御詞也

鼻のあたりおこめきて 式部か躰もおかしき躰

つねのうちとけゐたるかたには侍らて いつもの居所ニはゐす

ふすふるにやと 隔心にやとなり

さかし人

かろ／＼しき物えむすへきにもあらず まれニ問な

と言てをさなましく恨るやうなる人にてはなし

はやりかにていふやう つくろはぬ躰也

ふひやう 腹病 風病

さうやく 草薬

さうしらは 雑事等

ㄥ (24オ)

ㄥ (24ウ)

ことつけそや かこつけ也

おいらかに まめやかの心也

つまはしきをして いやなる心なり

すへておとも—— 十八段め也

三史五経 三史ハ史記前漢書後漢書也五経ハ易

礼記毛詩尚書春秋左傳ノ事以上是也

かななふみ 女文—— 過半 文字たくさんニ書はわるし

ことさらひたり 態とめきたる事也

ふる事をもはしめよりとりこみつ—— 最初より

古事だてなる事わるし

すさまじき折く つきもなき折也

萬の事になとかはさてもとおほゆる折から時々思ひわかぬはかりの  
心にてはよしはみ情たゝさらんなめやすかるへき 畢竟止ムか

ましそと云心也次手ニ被仰つれく草ニ云せやせましせてや  
有ましとおもふことをはせぬかよしと 此意相叶ヘリ

君は人ひとりの御有さまを 君とは源を申也人ひとりとハ

藤壺御事

これにたらずさし過たる事もなく物し給ひける哉と——

藤つほはさてもくよき程なる人とはめたる詞也

明し給ふつ 是まで一日ノ講尺

けさやかに

みたれ給へる御ありさま 衣裳なと脱ちらし給フ躰也

御木丁へたてゝ

ㄥ (25オ)

ㄥ (25ウ)

下ニ擦リ消シノ痕有。

なかゝみ 河海にくはし

さかし爰に句を切てれいはいみ給事——と讀也  
いとよかなり

紀守 伊与介か子也

なまけなる事 無礼ノ事也

けによろしきおましところにもとて人はしらせやる

紀守か

傍輩とも取もちて人をはしらせてやる也

かみ俄にと佗れと 紀守めい惑する也

そこはかとなきむしの聲——

六月なれは何共聞わかぬ虫共  
鳴也

ゑわらひ ゑみ笑らふ也

かみ心なしと 紀守なり

むつかりて 發積ムツカル

やをら やうく也 そろく也

さゝめく さゝやく也 私語ササメク

やむことなきよすか定り給へるこそさうくかめれ

葵上の御事をみな人の云也

ほうゆかめて 方曲ホウユカメ

とろろかけそへ火あかく—— 灯籠トウロウ

とほり丁もいかにそは そもし清

あるしの子とも—— 是より先の事を云り

まうと 紀守をさして仰らるゝ

ふいに 不意

いよのすけはかしつくや—— 源の御ことは也

┌ (26才)

┌ (26ウ)



何かたにそ 源の間給ふ也

┌ (27オ)

みなしもやに—— 紀守か答なり下屋ト、雑舎、事也

ありつる子のこゑにて 小君也

ものけ給る 物承るなり

まろはこゝに—— 小きみ也

女メきみは 空蟬の君也

すちチかひなるほとにそ—— 東と北とすちかひ也

中将の君は—— うつせみの女房也

中将めしつれはなん—— 此時分源氏も中将の官なれば

かくの給へり

たかふへくもあらぬ心のしるへを—— 中将とあればめすに随てたが

はぬとの給ふ也

└ (27ウ)

とうもなくて 動もなくて也

猶いとあさましきに—— 空蟬の心中

いとかやうなるきはゝきはとこそ侍なれとて——

あなずりて理不尽、事させらるゝとて源氏を恨申也

きはゝきはと云は伊与介か妻ニ成たれはとてかやうニ有

へき事かは吾も種姓たかき者にてあるをとうらむる也

あはめられ奉るも—— わるくいはるゝ心也爰はあはくしう也

人からのたをやきたるにつよき心をしめてくはへたれはなよ

竹の心ちし侍—— なよ竹はよ長クしてをれぬもの也

三光院殿柔ヘ勝ツ強ニと云語ヲ曳給りト

おほえなきさま 思よらぬ事也

ありしなからの身にて—— 元のわか身の位にてかやうの

御事ならは嬉しからんと也

さしはへて さしにさしてなり

すくくしく きこつなきやうなる心也

とりかさねてそ—— 吾身の成くたりたる事と源氏の今

夜の御ふるまひとを云る也

ことゝあかくなれは 悉く明る也

へたつる関と見えたり 引哥 あふ坂の名をたのめつゝこしかとも隔

つる関と今は成にき

光をさまれる—— 夜の明る事也

とみにも 頓

つかふ人にせん

あそんのおとゝやもたる 紀守をさして朝臣と仰らる真

人より朝臣と云は上なり真人を改めて朝臣となす也

世のたとひにてむつれ侍すと申 世間ならひにて継母は

むつれぬと申ス

五日六日 かやうに讀へし

ふかくしもたとらす 種々して知をたとりしると云也

こゝはやかて知と云心なるへし 物を尋をたとると云り

色くゝ人に問てたつぬるをたとると云也爰はその裏なり

此段の事三光院殿は実事なしと仰らる又後柏原院、

御哥辞三再會云題ニ此段の事ヲ讀ませ給り然は実

事

ㄥ (28才)

ㄥ (28ウ)

ㄥ (29才)

ある歎昔より説々也実事ある事さも有へしと素  
然仰られけり

めもきりて 目も霧て

心えぬすぐせ打そへり 下に成くたると又今源氏におもひかけ

らるゝとをかくおもへり

かゝる御文みるへき—— 空せみの詞也

さはなまいりそ さらは也

しか／＼と申すに 返事なき由を有やうニ申

あこはしらしなその伊与介のおきなよりはさきにみし人そ——

まへあひつる人そと虚言を仰らるゝ也

わかみくしけとのにの給て—— 御匣殿別当也装束調する役  
者也

めてたきことも我身からこそと思ひて—— 能事も似合ヌは

わるし

ひんなき つきなき事也

めいほく 面目也

君はいかに 君とは小きみをさして源の仰らる源ノ御心中也

ふようなる由を聞ゆれば 不用

ふせやに生る ふせやはいやしき家也卑下心云る也

れいの人／＼はいきたなきに一ところすゝろに——

れいの人／＼とは御供の人／＼なり一所は源氏の御事

さはれとおほせと さらはさてあれと也源氏の御心中

とそ 此書留も式部吾書たるとは明らかにみせず面白  
書さま也

書さま也

ㄥ  
(30オ)

ㄥ  
(29ウ)

(白紙)

追

女房などの物かたりよみし 何にても古き物語の

草子なるへし

其夜の事にことつけて かこつけて也

とふて給ふことのは 取出給ふなり

うひことそや 初事也

さけず 不<sub>レ</sub>避也

さうくしく心やましとおもふ 心くるしいなり

いひそし 言殺也つよく言事也酒をしるそし類也

此心もとなきもうたかひ—— 夕かほの上の事なり

こゆるぎのいそぎありく いその枕こと葉也

なかるゝまであせになりて 流るゝ

をよすけたる事はいはぬ—— をとなかましき事也

うちわたりの旅ね 大裏あたり也たひねとは只かりね

なりあたりなれはかりね也

もとのしな時代のおほえ打合—— 種姓も時のおほえも

うち合てよき人の心中等のもてなし已下あしきをは世間

に沙汰もせぬ者也それは何しニかく生出たるそやさは有

ましき事なるにいふかひなき亘そと也

其心しらひをきて<sub>置</sub>なとをなん 掟ノ字ニハ非ス

はしたなかりける御物かたり—— 源の御詞なれは有ましき

事なれとも当座のあひしらひなるニより御ノ字あり

ㄥ (30ウ)

ㄥ (31オ)

ㄥ (31ウ)

まうとたちのつき／＼しくいさめきたらむに――

数奇心ニ付／＼しき人を伊与かはよせもつけましと仰らるゝ也

御文をおもかくしにひろけたりいとおほくて 文の詞とも多し

心ちなやましければ人／＼さけす 煩しければあつかふ

人にてもとときなとにても有へし人去すして余所目しけゝ

れはそのさばりに依て御返事はならぬと申せと也空蟬君詞也

うはへのなさはかりはもてつけつへきわさ――

もてつくるとはもてなす事也心中さへよくは上つらは何ともし

なさうすると云心なり くたしをくたしと濁てもあるへし

と 院様勅定と水中御物かたり也 惣ての意は数ならぬ身

なれとかく思しくたし給御心を深ク恨ミ申也下臈の伊与か

妻なれはとてかく理不盡の義はいかゝと恨申也 きはをきはと

侍なれとてとは上臈なれ共今下臈に成たれはとて理不尽ノ御事

はいはれさる事とうらむる也

見なをし給ふのちせもや―― 引哥 若狭なる後せの山のゝちにまた

あはん心のけふならずとも

さる心地して人とかくしつめて御せうそこ―― さるへき心つかひ

して也人をしつめての心つかひ也

女ノ上カラ見テ さしあたりてをかしともあはれとも心に入ん人のたのもしけなき

うたかひあらんこそ大事なるへけれ我心あやまちなくてみすくさは

男カラ さしなをしてもなとかみさらんとおほえたれとそれさしもあらし

―― 此段見にくし曳替て男ノ方を女になし女の事を男なし

「らむに」ニ、「――」ヲ重ネル。

「ノ」ニ「心」ガ重ナル。

「(32オ)」

「(32ウ)」

て見ても苦かるましとや

おとも女もわるものは—— いとをしけれ三史五経の——

此いとをしは常ニ云ニはちと心かはれりそと知たる事を至極ト  
して見せ盡さんとするはかわいやなと云やうなる心也

二条の院にもおなしすちに—— 此院源氏の御所又は葵

上ノ御所も同しすち也

例のいつくよりとふて給—— 例とはいつもなと云心也

女などの御かたかへこそ夜ふかくいそかせ給へきかは——

かはの出葉ちと聞へにくし 院様仰らる女などの御かた

たかへこそあらめ夜ふかく急かせ給へきかはとみればよしと也

あらめと云詞を入れて心ニみるへし 水中此物語アリ

親のをきてにたかへりと—— 父権中納言は下臈の伊

与介か妻などには成すへき心にては無りつるものをおもひて

伊与介とむつくと心とけぬと聞也

むけに世をおもひしらぬやうに—— いとつらきと恨られて——

源氏ニ空蟬のうらみられてなり

さしもあためきめなれたるうちつけすきく

数奇く也 あたしく初よりやかてすきくしき

をは好み給はぬ也

かたかと 片才<sup>カタカト</sup> 角<sup>カト</sup>ノ字の心もあるへし

すかされより侍らん たらされよる也

ゆづるふらん ゆづる也

こるはかりのわさしておとして おとす事也

「 (33オ)

「 (33ウ)

したかひおちたる おづる也

もや 母屋 中ノ殿なり

をしなへたる大かたのは数ならねと

尋常大方のはかすならされ共ほと／＼に誰身ノ上ニもそ

れはゆかしくもなきと中将のの給ふ也

朝夕に——心くるしかりしかは——夕顔の上のあまり恨み給

はぬも却而くるしきと也

是なんえたもつましく——始終本妻ニ頼へき品ニは非

すとなり十分ニなき品なり

心はえなから鼻のあたりをこめき——心えなから也

そゝきあけて そゝきとはそゝめく事也

さりぬへきすこしは見せん よき文をは少しみせんと也

ほうけつき 法

数ならねとも程／＼——なん 頭ノ君のわか身ノ事をの給也

にこりにしめるほとよりも——林逸ニ云蓮葉の濁にし

まぬ心もて——此哥叶たるともみえすされ共見様ありたとへは

蓮は濁ニそみてしかもそまぬ物也尼ニ成ものハにこりニそまぬ

やうなれ共心は濁ニそみたるもの也然はかゝる人は蓮ノ濁ニし

めるよりもなまうかひなるへしとの心也されは悪き道にもたゝ

よひぬへしと云也 蓮は土泥より生すれともそれにもそ

なり女ノ心は土泥のごとし其より。蓮は生しかたきとなり

(佛心の)

なまうかひにては 世上の人の濁ニしむより尼ニなりてなま

うかひなると云り

ㄣ (34オ)

ㄣ (34ウ)

尼にもなさて—— 是もおなし女の事もあるは尼<sup>ニ</sup>なると

又尼<sup>ニ</sup>なさて取返しても皆よろしからぬ事は同事也さるにより

下ノ詞にとあらん折もしならめと云る也契の宿執ふかくて

帰りあふとも尼に成てなと<sup>ニ</sup>思は<sup>ニ</sup>恨めしからんと也

あしき道にもた<sup>ニ</sup>よひぬへく—— 面白<sup>ク</sup>書たり一段<sup>度</sup>云

合せたる上は善悪すゑ透らふか夫婦の本意そ

我も人もうしろ—— 心をかれしやは 心を置也さきの如<sup>ク</sup>

縦又相添ともさやうならん女はうしろめたくて心をかれぬ事

は有ましひの心也是も伊物に業平のを捨て出し女ノ又あひ<sup>かはし</sup>

たりしかと疑しく覺えて業ひらのわするらんとおもふ心のうた

かひにありし——と讀し類也その心にて紫式部か書たると見

えたり うしろめたくとは心もとなき事なり

なのめにうつろふ—— 前の段は男の心さしあるを知すして背き

恨<sup>ル</sup>事をいへり是は又男あた人にてうつろはんを同じやう<sup>ニ</sup>恨み

背かはおとこはをこましく思へしされは男ノ心は頼もしけなく

共見初しちきりを力なしとおもひて堪忍すへきの心也

けしきはみ 機嫌をみる也

おこかましき おこなる事也悪き事也うつけたる

かた也いやと思ふ心也<sup>引哥</sup>をかしやかなる事そ

たはふれにく<sup>ニ</sup>なん<sup>引哥</sup> ありぬやと試みかてらあひみねはたはふれに

まてそ恋しき 死たりし女の上さ也 恋きと也

ひとへに打たのみたらんかたは—— 是もなく成し

女をこそひとへ<sup>ニ</sup>頼たれと云心なり<sup>林逸ノ説</sup>

「(35才)

くき  
「(35ウ)



立田姫といはむにも——是も死たる女ノ事也

さるによりかたき世とは定かねたるそや——定かねたると

ある事心えかたし定たると有つへき所也 私十分思ふ

やうなる女はなきもの也され共紫上などの様ニ足らひたる人

千人ニひとりもあれば有ましきと斗も定かねたると云儀欤

山のこふかく世はなれて 木深ニあらず墨のこき事なり

如何

まいて君たちの御ため——をのこしもなんしさいなき物は

侍める 女は我まゝニならぬものもおとこは機ニ合あひものには

添す添たき物ニはそふわかまゝなる物そと云事也

(以下九行分空白)

并  
空蟬

并と云事其代の夏を書ニすくにその代の其人の事を

次第ニ不書して横ニ入て又人の事を書を并と云也たとへは

史記の世家列傳セイケレツデンのことし世家といふは世ヨ、ニ、ス家スと讀り直に

書也列傳と云は横ニ其代の人の事を書り如此類也又この

物語に限て豎ノ并シユ横ノ并ヘウと云事あり此卷は豎ノ并也

はゝき木ニつゝけて書故そ此事ちと心ににくき也能く思慮

あるへし并とは何時も先々横か本なりこの卷うつせみの列

傳と見へし列傳とは其人の事を一人別に書そ空せみの列

傳と見よ 虚蟬とも書也又は打蟬とも打磬蟬と云磬の

一名あり是ニよりての事也磬の音蟬ニ似せたり

虫損。

「  
(37オ)

「  
(36ウ)

「  
(36オ)

髪のいとなからさりし—— うつせみの髪は長からぬ歟

似かよひたる—— 小君空蟬相似たり

なみくならず 源氏の御事也

心つきなし つもし濁

わか車にて 小君か車なり

ゐてたてまつる 将奉る也

さりけなき姿—— かりき姿なり

後達—— 小君かいつくをもあけわたしたるによりてこたち

のかくいへるなり

こきあやの—— 紫ノこきなり

曳かくしたゞめり

いま一人はひかしむきに—— はうそくなる—— 西の御かた也

碁ニはかり心を入れて取みたしたる様躰なり空蟬はさも

あらずと褒給へり

小うちたつ 小打きめきたるもの也

そゝろかなる人 少ッせい高き人也

さかりは肩のほと さかり所なり

ねちけたる所なく—— ほめて云り

ふと見ゆる やかてみゆる也

けちさす 碁のためをさすなり

おくの人はいと静に—— 奥ノ人とある事少し相違せりとも

引哥 あれ奥の人はうつせみの君とみへし

伊与の湯のゆけたはいくつ数しらすかそへすしらす君やしるらん

（37ウ）

（38オ）

くちおほひて 袖して口を覆ひたる也

めすこしはれたる 空蟬の事也 晴 腫 目もと晴く

しき也 少しま腫なり河説いつれにても

このまされる人よりは心あらんと—— 空蟬よりはまさ

れる形と聞ゆ まされる人と云は西の御方也

あはつけし 軽々しきなり

若きみはいづくに—— 小君か事也

此みかうしはさしてんとてならず也 ならずはさす事也

さかし 領納し給也

こたみ 此度也今度ト書 このたひとある本も有也

たゝみひろけて 屏風の事也

やをらいたてまつる 漸也 そろくとも也

ひるはななめ夜るは—— 引哥よるはななめひるはななめにくらされて春は木の

二人はかりそふしたる 二人 フタリ 何れもくるしからす

あへか 物よはきかたなり

我ためにはことにもあらねと 源しのわかためニはくるし

からねとゝなり

ゆるされしかし

なをくしう 直くしう也

ぬぎすへしたる 脱すへらかしたるなり

おとろくしくとふ つよく問なり

あらず——

たけたち た文字清

「(38ウ)」

「(39オ)」

貼り継イダ本文料紙ニ記サレタ  
モノ。本行ト同筆。

コノ部分デ紙ヲ継グ。「ひるは  
」及び「めそいと」ノ行、  
糊継ギノ上ニ記ス。

「清」。「濁」ノ上ニ重ネ書キ。

つらねて つれて也 小君かおもとをつるゝと老人思也  
よッへ

上にやさふらひ給つ うへとは空せみをさして也  
つまはしき 弾指也腹たつ心こもる

いとふかうにくみ——はてぬ 是まで小君か心也又は源氏の  
御心とも見る也

なとか余所にもなつかしき—— 源の御詞なり

なを人からの

かの人もいかに思らん 軒はの萩の事也

されたる心に

うつせみの羽にをく—— 木かくれてはもぬけて

逢ぬ心也然れ共ぬるゝ袖哉とは源氏を思ふとノ心也

是は古歌なり心を替て爰ニ用たる返哥也伊物に

みちのくの前哥を心をかへて用ゆるとおなし事也

(以下六行分空白)

追

そほる<sup>る</sup>れは たはふれたる躰也 ほこりたる体也

(以下九行分空白)

夕顔

此巻は堅ノ并なり

(以下一行分空白)

六条わたりの御忍ひありき—— 御息所へ御かよひ

┌  
(39ウ)

┌  
(40オ)

┌  
(40ウ)

の更也御息所は前房ノ御妻なり前房かくれ給て後の

事也 前房とは延喜ノ御子也然とも御弟のやうニ書たり

か様ノ事此物語の風なり後に文献太子と申は此御子也

東宮ニ立給へき人の位ニ即給ぬ人を前房と申なり

大貳のめのと 源氏の御乳母なり惟光か母五条ニ居ヌ

おほち 五条ノおほちなり

此家のかたはらに 惟光か家也

はしとみ 半部 し文字にこるへし

をかしきひたいつき—— 夕かほの上は此時の衆にてはなし

たけたかき—— 物をふまへなとしてのそきみる也

さきもおはせ給す 御さきはらひもなし

玉の墓もおなし事なり 源ノ御心に観念也

きりかけたつ物 何たる物共不知垣などのやうなるもの歟

ゑみの眉ひらけたり 夕顔のつほみは蚕ニ似たる物なれば

かく云り

ひとりゑみの—— いやしき家ゐなれば独と云也

みすい身 聖徳太子かひの黒駒に乗て空ヲかけり守屋ヲ

御退治ノ時泰ノかはかつ一人隨身シ奉る是すいしんの始なり

このもかのも こなたかなた也 此面彼面也 筑波山に云ならはし

たる詞也されとも式部か心にもつくは山ニ非すとも有へき事と

おもへる歟

むねくしからぬ 棟梁也 棟々しからすと也

すゝしのひとへ 愛にて句をはかまなかく——

ㄥ (41オ)

ㄥ (41ウ)

本文料紙ヲ切リトツタ後ニ裏カラ紙ヲ貼ル。

白き扇のいたうこかし たきものなどの煙にこかしたり  
かきをゝきまとはし—— 惟光か詞也

ふひん ひんなき也

らうかはし 乱りかはしき也

阿闍梨<sup>アサリ</sup> 比叡山のあさり也

捨かたく思給へつる事は 尼<sup>ニ</sup>なる夏を捨かたく思つる也

たゆたひしかと やすらひしかとゝいふ事也

あみたほとけの—— 来迎を待となり

日ころ—— 源の御詞なり

九し<sup>ニ</sup>なのかみ<sup>上</sup> 九品の浄土の上品上しやうなり

此世に恨のこるは—— 執心の残る也

かたほ かたちくの事也 ほををと読へし

ひそみ 顔にかひを作るやうなる儀也

なつさふ 實泥<sup>ト</sup>書也

おもひむつふる——

心あてに—— 夕顔上ノ頭中将とおもひてよめる歎如何 夕かほの

上の必読るにては有ましき歎官女ともの中ニ誰にてもよめる歎

源氏と見定て夕かほの上の哥ニすれは今少し卒爾なり

ゆへつきたれは

病者 はうさと読給へり

やと<sup>ヤウメイ</sup>もり 留守居ノ事なり

揚名のすけ 此事源氏三ヶの大事の一ツ也 まづは國々ノ

守の儀也猶奥義は達者ニ尋へし

ㄥ (42才)

ㄥ (42ウ)

あらぬさまに書かへ給て 手跡の模様を書替給り  
よれてこそ——なれてこそと云心也上ノ句はそなたよりの

心なり下句は源の御心也 折てこそも苦しからず

またみぬ御さまなれといとしるくおもひあてられ給る——

女共の穿壁なり

隨身はまいりぬ 退く也

みさきの松 せうめい也

惟光日比ありてまいれり 程へて参れり

さ月のころより物し給ふ人なん 頭中将の事也

しひらたつ 褶 此字也 うはもノ事なり上にきる物也

此人夕顔也

人のうけひかぬ程にてたに—— 惟光か心中也

おいらか 大やうなる心也

うらもなくまちきこえかほなるかたつかたの人を

軒はの萩の夏也

ねひたれと 年すこしふけたる也

御心の中に うつせみや軒はの萩やなど也

つれなきこゝろはねたけれと 空蟬の事なり

人のためは—— 伊与介事也

さるへき人にあつて—— 聶<sup>ニ</sup>とる事也

さすかにたえて—— うつせみの心中なり

なけし—— けもし清 なをさり也

おもむけ聞え給て 云趣けたる也いひなひかしたる心也

┌  
(43ウ)

┌  
(43オ)

御息所の御支也 源しの御おちよめ也  
 齡のほとも<sup>も</sup>にけなく み息所は源氏よりは勿論御年

ふけ給り

ねふたけなる 源氏の御事

咲花にうつるてふ—— 中将の支を読給也

おほやけ事にそ聞えなす 御息所の事ニ云成ス 中将ノ返哥也

さふらいわらは 童子ノ事也花鳥の説は誤なり

大かたニ打見たてまつる—— 爰は草子の地也

まことや—— 前ニ云たる事を中絶して又書処ニ書詞也

あなかまとてかく あはく事そ手かく歟

中将とのこそわたり給へ 頭中将殿也

さかしうしをきたれ かもし濁ル

むつかりて しかる事なり

小とねりわらは

あない 案内

我とちとしらせて 誰ともしれぬやうニ紛らはしたる也

あま君のとふらひに 大貳の尼

御けしき

もらしつ 通はしめ給てよりさま／＼の事共あれとも書

すとなり

へんぐ<sup>ぐ</sup>あめきて へんけと読へし此仮名つかひいさゝか

口伝アリ 変化

「(44才)」

「(44ウ)」

「清」ニ「濁」ト重ネ書キ。

「く多」ノ字ヲ途中マデ擦リ消  
 ス。「ん」ノ一部「く」ノ上ニ  
 カカル。



大輔 民部大夫惟光なり

やうたかひたる——源氏の様躰たかふなり

おもほしよる 二条院へむかへんと思しよる也

はかられ給へかし——はかされ給へかしとなり

八月十五日 三光院殿は月と読給り八月とよみても苦し  
ハチグハツ  
からす

なりわい 家業ナリワイ

こほくとなるかみも 清濁いつれにても

白たへのころも——引寄 むかしよりしろき衣をうつなれと

聲には色の有けるものを 京極殿

心はみたるかたをすこし添たらはと見給——よくほり

か様におほせり夕顔十九の御事なれは道理也

みたけさうしにやあらん 金峯山の金剛蔵王は

弥勒の出世を守護なり

こちたし 事の外也

さきの世の——前因ノ事也三世をかけてよめり

さるは心もとなかんめり はかなく成へき前表也

ゆくりなく 取あへぬなり 不意ユクリナシ

雲かくれ 是は今よまぬ詞也不吉の故也

なにかしの院 なにかしとはその名を云事也 私 何の院かの

院と名を云事歟

山のはの心もしらて——山のは、源氏にたとへ月はわか身ニた

とへてよめり

よそふほと 間也

「(45才)

「(45ウ)

けいめいしありく 驚て馳走奔走する体なり

ふひんなるわさかな ひんなぎ也

おき中河<sup>中</sup> 名所ニあれ共爰は名処の心ニあらず海中ニなかれ

河也絶ぬもの也 鴉鳥の沖中河と云事は又各別也鴉は とをる

一段息の長き鳥也水中ニゐる夏久し此ゆへに鴉鳥の沖

中河とつゝくる詞なり 沖を息ニまきらかすおきの

おといきのいと五音相通也中河ノ中を長ノ字にまきら

たるもの也 かし

へちなうの方に 世諦の道具を入ル処也 別納

夕露にひもとく花は玉ほこの—— 玉鉦とはかりして道ニ成

夏は是か始かと三光院仰らる

光ありとみし—— 前の事を云也心あてにそれかとそみるしら

露の光そへたる夕かほの花と前ニ読りかく読懸つるが

其人にてはをはせぬとなり

是は河海の説也これに随へと三光院殿仰らるゝと也

あいたれたり やはらかにあまへたる心なり

我からなゝり 吾からなん也され共なんとは読す

右近かいはむ事—— ちかくもえさふらひよらす 右近か恨ん

とて惟光ちかつきよらす

閑なる夕の空をなかくめ給て 空をみる事は愁の躰也

又源の詞にも ひるも雲をのみ見つる物をいとおしとおほし

てとあり

なこりなく成にたる—— 互ニ隔心なき様躰なり

ㄥ (46オ)

ㄥ (46ウ)

「と」ニ「い」ト重ネ書キ。

此院のあつかりの子 瀧口にてありけり

こはづくれとおほせよ かるくしく直ニ仰られぬなり

なたいめん

いとうたてみたり心地—— 右近か詞なり

けとられぬる 氣を取らるゝなり

例ならぬ事にて 参つけぬ事也

なけし 敷居をもなけしと云也

このおとこ 瀧口又は火をともしつる人となるへし

ふくろふは是にやとおほゆ ふくろふかとおほす也

おほけなく浅ましき心のむくひに—— 藤壺ニこゝろを懸

給事也

うちにきこしめさん—— 葵上の事也

かねてれいならぬ御心ち——らん 始より御煩の心あり

かと問申也 つる

よゝとなきぬ つよく泣事也

しほしみぬる人 世間に功の入たる人の事をかく云也

くえんそく けんそくと読へし 少シ口伝あり

山寺こそ猶かやうの事をのつから行ましりものまきるゝ

事侍らめと思まはして か様の死人なと何する事の類あ

かこかに かこやかなり 囲なり また也

御帳

五月

ㄥ  
(47オ)

ㄥ  
(47ウ)

神事 かみわざと読へし  
かんわざとも

よんへも よんへとよむへし

かくこまやかにはあらて—— 大方ニ仰られよと也

たいくしく 退くしく也

つれなくの給へと 虚言をつれなく仰らるゝなり

藏人の弁 頭中将殿の御弟也

かの古さとの人 古郷とは五条なり

おもほし物せさせ給ふ

少将の命婦 惟光か妹と也

かゝり給へる せめて是がかゝりと云心也

さらにことなくしなせと

ことくくすへきにも侍らすとてたつか

わさとの聲たてぬ念佛をする 葬せぬ先ニは無言念佛

寺くのそや 初夜也 なる物也

大となる 大徳也

誰とは知ぬに 源氏をも夕顔上をもしらす

我くれなるの御そきられ—— 源しのを其まゝ夕

かほの著給る也

すへなく 便なき也

候はせ給 さふらはせ給ふと読り

たつきなし

さふらはす すもし清

ふくいとゝろうして 夕顔のうへの衣を黒ッしてきる也大昔は

「 (48オ)

「 (48ウ)

本文料紙ヲ切リトツタ上カラ新  
シク紙ヲ継グ。但シ白紙。

服の定まりなし右近か事共也又説あり古抄ニ委  
雨のあしよりもけにしけし しけき事をは如<sub>レ</sub>雨脚<sub>二</sub>と

云本語あり

けいめいし給て 営ム心也馳走の心也驚<sub>ク</sub>心もあり  
をこたりさま

うちの御とのゐ所に―― 桐壺なり

九月 なかつきと読給り  
御名かくし

あいなかりける心くらへともかな 詮もなき也互に名のらさり

しを心くらへと云り

うちにいさめのたまはするを 内は大裏也

又うち返しつらうおほゆる―― かく有ならはと却而つら

七日<sub>ナメカ</sub>く佛かくせ―― 十三仏を薬師如来まで七日ことに  
き也

かくもの也

にしの京ニ御めのとすみ侍所になむ―― 揚名介か妻也

しか 合點をしたる心也

さとはしらせで さうとはしらせすして

かの夕かほの宿りを―― 右近か心中也

とりはつして

此かたの御このみにはもてはなれ給ふましき――

源しの思召すやうならむと右近か云也

見し人の―― 鬼<sub>ミ</sub>みし人の煙を雲となかむれは名も

むつましきしほかまの浦

「(49オ)

「(49ウ)

「(50オ)

まさにななき夜と—— 八月九日正長夜千聲萬聲

無了時 朗 白楽天此古詩の意也

うけ給りなやむを—— 是から空蟬の文のこと葉也

とはぬをも—— 花鳥の説あやまる也

誰<sup>タ</sup>かいはまし事にか 源氏の吾こそとの儀也

又ことの葉にかゝる命よ 今ニ生<sup>イケ</sup>る命面目ないとの給り

かのかたつかたは藏人の少将を—— 聶<sup>イ</sup>取也

ほのかにも—— 軒はの荻の方へつかはし給哥也

たかやかなる荻に付て あまり忍ぬ心也

とりあやまちて—— かりける 草子の地也 心は源氏の我そと

しらは少将もゆるさんとの御心おこりなり

御返<sup>ミ</sup>くちときはかりを—— 口はやなる事也

されはみて されたる心也

四十九日 なゝなぬかと読給り

さうそくよりはしめて—— 女ノさうそくなと布施ニ引

願文つくらせ給ふ 御自作なり

あみた佛<sup>ミ</sup>にゆつり聞ゆる—— 自心悟りの旨に非す

弥陀は名号を唱へはたすけ給んの御願也

たゝかくなから加へき事侍らさんめりと申 添削すへき

事御座なしと申也

何人ならん其人と聞えもなくてかうおほし歎かすばかり也けん

すくせの高さよといひけり 皆人の申は何人そやかほとに歎

給はと不審する也

かせ

ㄥ (51才)

ㄥ (50ウ)

はかまをとりよせ給ひて 是も布施ニ引給り  
なくくも——とけてみるへき とけてとはいづ解脫の門に

入んと云心也

この程まではたゞよふなるをいつれの道に定りて趣らんと

おほしやりつゝ 四十九日の間是有にまよふなり

此家あるしそにしの京のめのとのむすめなりける 右近か母なら

て又めのと有也揚名介かしうとめ也大貳の妻也西の京ニあるめのと

也高人にはいくたりもめのとあるものなり

ゆゑしくなん いまくしく也

手向 はなむけ也

うちくにも うつせみの事也

追

てさくり 手あたり也

誰はかりにかはあらん猶このすきものゝ—— すきものとは

大夫をさして云也大夫とは惟光也 心は手さくりにも大方源

しそとは知れりさあれは大夫のしわざとおもへとも此大夫知ら

ぬ顔にて猶好色めけは扱は又いかなる事そと女かたに思也

せめて 切になり

まけてやみなん 負て欵 つれなき心ニまくる也

くちときはかりをかことにてとらす 小君ニ文の返事を下さるゝ

也とらする也

又なくらうかはしき—— 又なくは程なき事也近き

たいくしき事とはおもへと—— 不<sup>林逸云</sup>可<sup>なり</sup>然ノ心也 断字也

ㄥ (52オ)

ㄥ (51ウ)

又は退々 一葉ニ云こゝにては恐たるといふ心なり  
(以下九行分空白)

「 (52ウ)

若むらさき

此巻は歌を以て名とせり

手につみて

いつしかもみむ紫のねにかよひける野へのわか草 末ニ見  
ましなひ—— 引事 夜深経戦場寒月照白骨 此杜子美か句

にても瘡病おつるなと云り咒 マシナイ

こそ夏もよに—— 人なみのやうなる事也

しゝろかし しそひやかしたる也 也足はしゝろかしとあそ

はしけり萬一御失念か不審

ヤミ 三月のつこもりなれは

山の櫻はまたさかりにて 曳哥 古郷の花はちりつゝみ吉野々

山のさくらはまださかり也

すかせたてまつる 食する事也

やらうなと 屋と廊となり

こたち 木立也

なにかしの僧都 なにかしとは其と云事也

きよけなるわらは 女童也

なにかしのたけ ソ そこ／＼の嶽と云ことなり

ゆをひかなる 廣き心也 寛 ニラヒガ

あやしきこと所にす 別の夏もなくして奇特ニおもしろ

きなり

「 (53オ)



新<sup>ニ</sup>ほちのむすめ 新發也明石ノ入道の事也女は明石上<sup>メ</sup>也  
いたしかし 事過たるやうなる夏也  
おくまりたる 奥<sup>ウ</sup>ふかう也

「(53ウ)

さいつ<sup>コ</sup>ろ 近<sup>ヲトイノ</sup>曾<sup>サイツコロ</sup> とよめる文あり然とも一昨日ニ限るへから

す世話ニひとひはなとゝいふことし

代<sup>タ</sup>く<sup>ニ</sup> たいく<sup>ニ</sup>にと讀給ふ也 国司は四か年つゝにてかはる五か  
年めに帰るなり

播麻の守の子の藏人—— 当受領の子よし清也

さいふともいなかひたらん 入道のむすめの事也

かやう<sup>ニ</sup>てもなへてならず—— 良清か心におもふ事也

ち<sup>チ</sup>ふつすへ奉て 持佛

四十<sup>ヨシヂ</sup> かく讀給へり

かははいとあかくすりなして 目をする也泣給へる顔なり

おほえたる<sup>ニ</sup>ころ 尼<sup>ニ</sup>にたる事也

いぬき 童君也 女童也

少納言 御乳の人なり

さいなまるゝ しかる夏也

をのかかくけふあすに 身上を尼ノ自言する也

ねひゆかん うつくしくとゝのをり行事也 調行<sup>ネビユク</sup>

こ姫君は—— 尼ノ息女紫上の母儀なり とのにをくれ

殿とは尼公ノ男也是按察の大納言也

つやく<sup>ニ</sup> いかにもうつくしき事也

をくらす をくらかす也

「(54オ)

消んとすらん 消しとの儀なり  
惟光をよひ出さず すもし清

しるしあらはさぬ時 驗者のしるし也

またみぬ人—— 尼などの源氏をまた見ぬ也

燈籠<sup>トウロウ</sup>などもまいり 庭ニあるやうニ聞えたれとも是はさ様

にてはなし 紹巴追善ノ千句ニ歴々の者共か砌のとうろといふ

句をしけり此段のこゝを見あやまりてしけると也足被仰候

みやうかう 名香也此字

我御つみのほと—— 源の御詞也女院ニ心をかけ給ふ事を

おほし召也

夢をみ給し 作て虚を仰らるゝ也みぬ夢也

すきくしきかたにはあらてまめやかに—— 風流かましき

人にはあらずと聞と也

兵部卿の宮なん 紫上の御父也紫上の御母は兵部卿の別妻也

行かうつらふかたも侍りなから 葵上の御事をの給ふ也

をは 祖母の事なり

そやいまたつとめ侍らず そやとハ初夜の事也

雨すこし打そゝき山かせ冷かに吹たるに瀧のよとみも音まさりて

音たかう聞ゆ

雨に瀧の水まさる也

すゝろなる人も——

なき人もとといふ心也

すゝの脇息に—— 尼の念珠也

よづゐたる 似合たる也

「(54ウ)

「(55オ)

「(55ウ)

枕ゆふ——源氏の御袖いつもはぬれましきと也

うたてもあらめ うたてはへたて也 隔

いふかひなきほとのはひにて——源の御詞也むつまし

かるへき人とは桐壺の更衣の御事也

さしくみに さしより也

こしんまいらせ給ふ こふうの夏也 謹身

くうつきて 功

かれたる聲のいといたうすぎひかめる 聲をすかすと云におなし

僧都みえぬさまの御くたもの 種々の馳走なり

かしこければ 忝ければなり

うとんけの花まちえたる——僧都の哥也源しをうと

花に比せり 難なり

開なるはかたかなる——

とッこたてまつる 獨鉦

ふたらくより くらよりとある本もありと也

こんかうし 本ノ実ニこんかうしと云物あり

ひしりそうづ 兩人也

すぎたるふくろ 何たるものともしらす只結構なるすぎ袋欵

御すぎやうなとして

まねひきこえ給へと 源の仰らるゝやうに尼君ニ僧都ノ傳え

ともかうも—— 尼の詞也 給へ也

さうの笛 箏の夏也

一日二日 ひとひふつかと讀へし

「(56ウ)」

「(56オ)」

からうしてとはぬは—— 葵上の御詞なり  
まれく 稀也

よとゝもに 平生の事也

一そ<sup>ヒト</sup>う 一類の事を云り薄雲ノ一類也

とめてこしかと 留

さたすきたる 半<sup>サ</sup>過たる事也 央<sup>サタ</sup>

ゆくて 次<sup>サ</sup>手の事也

嵐吹—— 一向ニ取合<sup>ニ</sup>返哥也花の上の夏はかりの返哥也

少納言のめのとゝいふ人あへし 有へし也

詞おほかる人にて よく物いふ人なり

はなち<sup>ハナ</sup>かき 一字つゝいろはのやうニ書事也

山<sup>山</sup>のかけはなるらん 影なれ共<sup>共</sup>けと讀也

藤つほの宮なやみ給ふ事ありてまかて給へり

条<sup>条</sup>あり此御さとへまかて給也

御里は三

いかゝたばかりけん 源氏を道ひけり

見ても又—— 定なし其中消たきと也

殿におはして 二条院なり

宮も猶いと心うき身—— 藤壺の御事也

わか御心にはしるうおほしわく事も有けり 源の我御

子と知<sup>知</sup>給也

ありしにまざるもの思ひに 藤つほの御事を也

かしこまりをたにとて 忝<sup>忝</sup>を也

齡すき侍て 紫上の事也

ㄥ (57ウ)

ㄥ (57オ)

本文料紙ヲ切り取ツタ後、裏  
ラ紙ヲ貼繼イダ上ニ記ス。

えならぬ 自由ならぬなり又はたゝならぬ也

見ばをとりやせむ 藤壺紫上との事也

十月カミナツキ いづれにても

こみやす所 桐壺の更衣ノ御事也

れいのところに入たてまつりて 擦察ノ大納言の家也

こ姫君のいとなさけなく 紫上の御母也

過給ぬるも 尼君なり

わかひて おさない事也 紫上の御夏

あしわかあしの浦 名所なり

めさめましからん 面目なからん也

よるなみの 源しのより給也

あそあそひかたき あそひの相手なり

宮のおはしますなめりと——父の兵部卿ノ宮かとおほし召也

このひさの上に——源しのひさの上にと仰らるゝ也

すへり入て 木丁ノ中へなりその夜は源しとまり給り

ひとへひとへばかりをゝしくゝみて をしくゝみてとはきる事也

さはりしもせし とまりしもせしの心也

あちきあちきなうも有かな—— 少納言の云る也

ありへて 有経て也

此人も事ありかほにや——惟光ニ對していへり密義の

なきをなき知せんとて云也

大夫は 惟光也

をさ／＼あへしらはす をさ／＼は懇と云心也爰は念比ニあへし

┌  
(58オ)

┌  
(58ウ)

らはぬと也

しかく<sup>ナ</sup>と聞ゆれば 而々 云々

車のさうそく<sup>ナ</sup>さなから—— 取つくろはぬ其まゝの躰也

女君れいのしふく 葵上也

せちに 急<sup>ニ</sup>なり

物のたよりとおもひていふ 御忍ひありきの便り歟

やともえ聞えず やあともえ申さぬ也

朝霧を—— また夜のふかきを朝霧と虚言をいひて驚

かし

あらざりけりと—— そてはなき也父にてはおはせざりけり

（59オ）

大夫少納言など 大夫は少納言か傍輩なり

さへきにおはしまさは

御<sup>ナ</sup>そとも引さけて

そは心な<sup>ン</sup>り それハは心次第と也

御丁御屏風

うときまら<sup>ツ</sup>人

にひ色のこまやかなる こまやかとはこき色也

ひんかしの對に—— 今御座あるは西の對なれはかく云り

おいらかにわたさんをひんなしとハいはて—— 有ま<sup>ハ</sup>にはいはて也

はふらかし

きたのかたも—— 兵部卿ノ宮の北ノかた也紫ノ為ニ御まゝ母

やうく人まいりぬ 二条院なり

（以下九行分空白）

（60オ）

（59ウ）

追

みつから聞えさせぬことのすち—— 心得かたきなと云<sup>心</sup>欵<sup>は</sup>は  
むらさきの上に御好色の事也  
何か浅おもひ給へらん事ゆへ らんにて句を切へからず  
今より見たてまつれと浅からぬ—— 幼少なれは未好色の心なと  
はなけれ共志はふかしと也  
またおとろひ給はしな 驚なり また起給ぬるなと云心也  
(以下四分空白)

┌  
(60ウ)

末摘 慶長九閏八月二日於水無殿<sup>瀬</sup> 素然

此卷すゑつむの君の列傳と見るへし後の卷も先の卷  
にも書り又空蟬の卷も此のことし

おもへとも猶—— 思へともくとみるへし  
こゝもかしこも打とけぬ—— 御息所や葵上やなどの事也  
心ふかう  
いとまじさに あらそふ事也

ことくしきおほえ—— 種姓はよくなくともと也夕顔上の  
様な人をと尋給也

みつけてしかなと 願哉也  
いくたりをも 文の事なり  
つれなう心つよき—— 是は草子ノ地也  
なをくし 成くたりたる心也

┌  
(61オ)

萩の葉も—— 前=あひ給し軒はの萩の事なり

わかん<sup>と</sup>とをり 色く説あれとも畢竟王孫といふ事也

大輔の命婦 兵部大輔かむすめなるに依て父の名をかり

大輔ノ命婦と云り女は何れも名なきによりかくの如なる事

多し命婦か為に左衛門のめ<sup>と</sup>とは本の母也今の兵部大輔か

妻はまゝ母也左衛門のめ<sup>と</sup>とは筑前守妻<sup>なる也</sup>

わかと わかうとゝよめり

ちゝ君

いみしう

心はへかたちなとふかきかたはえりし侍らす 細ゝ参れ共上く

の事は聊余に近つかぬ事なればえ見ぬと云りしらぬと云り

さるへき さるへき也

かたらひ人

よしつぎて

いま一くさやうたてあらん 是酒ノ夏也河海弄花<sup>ニ</sup>

さやうに—— 源氏などの聞せらるゝ様<sup>ニ</sup>有ましと也命婦か

こと葉也

まかッてぬ いづくにてもかく讀へし

打とけたるすみかにすへ奉て 傍なる殿<sup>ニ</sup>源を置申也

ものゝねすむへき—— 今夜は物の音も澄ましき夜と

云也命婦か心に御琴不出来にて聞をとらせは如何ゝと心もと

なくおもへり

百しきに—— す多つむの詞也大内へ出入の命婦か聞

くは耻しきと也

ㄥ (61ウ)

ㄥ (62オ)

「也」薄墨筆、補筆カ。



あいなう——源氏の聞給はむ事いかゝと命婦の胸つふるゝ  
物の音かくのすちことなるものなれは　きんの琴は生得也

おもしろき物なれはとの心地

むかしものかたりにも——花鳥ニ委シ然ともそれまでも

なし何にてもたゝ夢物かたりなるへし花鳥のもよし

命婦かとあるものにて　分別ある人也

御かうしまいりなん　格子をゝろす事也

にはかに我も人も——何たる事なとは有まし人こそ

よれとの心也

ちきり給へるかたやあらんいとしのひて帰り給ふ　源氏余所への

御契やありけん帰り給ふ

うへのまめに——上とは桐壺のみかとなり源しをあまり

実ゝしきと常く帝ノおほし召ニかやうの姿をみせまいら

せいでと命婦いへり

是をあたくしき——これをあたくしといはゝ女の上は

何とあらんとの給ふ也女とは命婦をさして仰らるゝ也

あまり色めいたり——いつもか様なる事なと仰らるゝ

を

ㄥ  
(63オ)

すいかい　すい垣也

心かけたる　けもし濁

大とのにもよらす二条ノ院にも——源の御事

ないかしろにて　取つくろはぬ躰なり

下まつなりけり　頭中將の待給也

ㄥ  
(62ウ)

此君を見給ふに—— 頭の君と見て源の安堵し給也

かうしたひありかはいか<sup>に</sup>せさせ給はんと聞え給ふ 是は頭中

将の御諫也

をくらかさせ給はて—— 頭の君の我等をめし連られよと也輕々

敷御あるきは勿躰なき儀と也

かう見付らるゝ—— 源の御心也

あまえて たはふれてなり

御なをしともめして かり衣姿<sup>キヌ</sup>あらざる也なうしと讀ム

れいの聞過したまはて おとゝやかて出給ふ事をいふ也

中務 あふひの上の官女なり

大宮は 葵上の御母義也

君たちは 源しや頭の君やなと也

この君のかうけしきはみ—— 頭ノ君の心中也

すくし給てん—— 源へは返事あるを妬ム也

こなたかなたより文なとやり給へしつれも返事見えす

哥も手も叶ぬ故也

おもしとても 心をもき也

心みにかすめたりしこそ—— すゑつむをそと曳てみつる也

いひよりにけるやと すゑつむへ云よるやとなり

したりかほにもとの事を—— 我をたつる心いてきたり

らうたかるへき

らう／＼しうか<sup>も</sup>とめきたる心はなきなめり 才覚はなき也

人しれぬ御物おもひの—— 藤つほの御事なり

┌ (64オ)

┌ (63ウ)

まけてはやましの御心さへそひて 空しくてはやましと也  
よつかぬ 世なれぬ也

そこはかとなくつれ／＼に心ほそうのみ—— 源の御心なり  
さう／＼し

中／＼なる道ひきに—— 命婦後悔の心也

いまは浅茅わくる人も—— よもきふの巻書んとての序を

こゝに書出した

御心 清濁いつれにてもくるしからず

ち／＼君にもかゝる事なともいはさりけり 命婦か父也

八月廿ハチケツジツ日 かやうニ讀給へり

御せうそこやきこえつらん 源氏へ命婦か申やるかと也

限なき人 位かきりなき高人の事也

いなひぬ みぬと讀也

をしたちてあは／＼しき 理不尽なる事などはよもあらし

と也

ふたま 寢殿つくりには必ふたまと云所あるもの也四疊半也

うしとらの角カドありよひの僧などの居する所也寢殿作りは

定たる物也

夢しり給はさりければ 努しり給ぬ也

さうしみ あるし、夏也こゝにては末つむの君なり

心けさうもなくしておはす 此きみは引つくろふすへもしり給す衣裳

なとも人のさせたるまゝまゝして其まゝまゝ給也

さし過たる事は見え奉り給しとおもひける おほとかにしてさし過

「(64ウ)」

「(65オ)」

「日」ヲ擦リ消シテ「よ」ト書ク。

たることの有まし斗は心安しと命婦か思ふ也  
 吾つねにせめられたてまつるつみさること—— 命婦か心ニ

わかせめらるゝ事は止へけれ共すゑとをるましき事なる程ニ末  
 つむの御ものおもひ出来んとおもふ也  
 されくつかへる しとけなき也

ゑひのか 説多し然れ共ゑひかうという薰物の一名と心得  
 へし

いくそたひ君かしゝまにまけぬらん—— 天文八年五月

十二日議定所ニ於テ講尺の時しゝまは河海に日本記を引て進  
 退の字尤トモ可然と云ゝわか幾度もそなたの進退ニ負テ

堪忍する也物ないひそと承はらは又それに従へし今までハ  
 物ないひそとは承ざる程に也當時みなしゝまを無言ノやうニ  
 心えて用るは僻事にや進退の字の心也しかるをしゝまに鐘  
 つくかたに取なしてよそへ云るなるへし人の我まゝに物を  
 するをしまいにすると云は此道理也進退の字をしゝまいてと  
 よめるニ通へるにやとおほえたり然らはしゝまいと声を讀へき

— (66オ) —

にや先公此声を用給り 私云先公ト逍遙院也此抄は称名  
 院ノ也 又某連云此事講尺過て也足様之御本を申うけて  
 其まゝ写置所也 私トこゝにあるは也足之御夏也

人つてのやうにはあらぬ御事やうに聞えなせは—— 末摘ノ哥の  
 やうニ讀り添こゑのやうなる事也

いとかるもさまかへて—— 別になひく方あるかと也  
 おどろくしうも

— (65ウ) —

或イハ「字」カ。

ゆるひにけりと　ゆるいと讀り

かるらかならぬ人　常陸宮の御女なれへ也

朱雀院の行幸　寛平たるへき歟昔は何れの帝も御位を

去給へは此院ニおはすなり一人の御名ニあらず御隠居ノ王の御

座あり処なり冷泉院もむかしハかくのことし今は院の御

所かやうにもなし

舞人　まひうと　かくよみ給り

まつほと過て　文を待ほと也後朝の文を末摘の方ニ待也

いふせさ　不審の心なり

はひをくれ——　紫はあくをさすものなれへ其はひけのぬけ

たる古き帛也

文字つよく　をし付て筆ふとに書たり

中さたのすちにて　中古の様子也

君たちあつまりて　大殿にての事也子達集り給也

其比の事にて　わさにてと云心也事の字をハ態とよめり

大ひちりき尺八の笛　大尺八と云もの長サ一尺八寸

大鼓をさへ——　大鼓は上へはあからぬ物也同しく鐘もあから

花鳥ニ見えたり

ぬすまはれ——　我と我ひまをぬすむ也

命婦はまいれる　此時分までひとよりす多摘ノもとに命婦ノある也

此人のおもふらん　命婦をさして也

物おもひしらぬやうなる心さまをこらさんと——　源氏の了簡

して仰らるゝなり

┌  
(66ウ)

┌  
(67オ)

御よはひや思ひやりすくなう—— 御よはひと一説あり是は  
わるし不可用

「(67ウ)

此御いそぎ 行幸ノ事也  
立とかはらす 木帳は立所定まりたる物也

ひそくやうのもろこしの物なれと ひそくとハ青地ノ茶碗の物ノ  
夏也上古ハ一段秘藏したるもの也  
何のくさはひもなく くさわひと讀へり 種 御膳のいか

にもそさうなる事也

しひらひきゆひつけたる—— 衣類也そさうなるもの也其  
時さへ稀なるもの也まして今時は何たるもの欵不知也  
ないけうはう—— 内教坊ハ女の学文する所也おかしき女  
ともそこにあり

あるばや はやは出葉なり

齋院にまいりかよふ 此齋院は誰共しらす

いざとき さもし清む

かうし手つからあけて——

はや出させ給へ すゑつむへ申なり

打とけまさりのいさゝかもあらは—— 草子の地なり

普賢はさつのよりものとおほゆ 此物「語」の狂言に書たり

さらほふ 瘦つまりたる躰也

かみのかゝりは 髪は一段よしと聞えたり 髪ノ懸場

き給へる物ともをさへいひたつるも—— 是は草子の地也

ゆるし色 こき紅ニあらずちと薄きを云也禁色にてはなし

「(68オ)

されはゆるし色と云也

「(68ウ)

いともてはやされたり 見めのあしきに又衣裳あしくして  
猶々見くるしと也

きしきくはんのねり出たるひちもち—— 威儀高して

女ニ似合さる也

ことつけて かこつけて也

朝日さす—— たるひつらゝ同じ事也当代はか様の事は

讀まし

松の雪のみあたゝけに 三光院殿御説はあつく降たる

雪まで也別の説不入

橋の木の埋れたる 雪ニ

名にたつ末のと—— すゑの松山なとゝよきあへしらひ

「(69オ)

なるを何共あへしらひのなきをの給ふなり

いみしき 心あまたあり爰はあしき心也

哥  
みる人もおとらすぬらす—— 源の御袖もぬるゝや御憐の心也

若きものはかたちかくれすと—— 秦中吟ノ一首をもて此段

は書り秦中吟を思召出して吟し給へり

頭中将に是を見せたらん時—— わろ口をいはんとおほす也

まけて けもし清 負

としも暮ぬ さりなから此年の事又末にもあり

かしこく 恐かまし也

ことこめたれば 言籠

つゝみ衣ほこ

裏綾

衣宮時繪

河海ニ見えたり

「(69ウ)

私口打をきては入てと云事故

「おとら」ノ下ニ擦リ消シノ痕。

押紙。

ひとり引こめ侍らんも—— 命婦か詞也ひとりとは命婦わか  
夏を云り

あさましのくちつきや—— 是は一定の自作と覺たり前

の哥よりもわるし

今やう色の—— 花鳥ニ委し こき紅よりは薄し中紅より

は又こき色也当代出来たるによりて今やうと云也

なをしをうらうへひとしくこまやかなる 此事衣となをしと

二ニ見へし 花鳥ニ云上ニ云るいまやう色はきぬを云也

この直衣も今やう色のうらおもて同色なるを云也

なをくしう 無調法なる事を云り

花のとかめを—— 命婦か心也

くれなるの一花衣—— 命か歌なり 名をしたてずは

とは縦ちきりは薄くとも名をはし立給ふなと讀り

くたす たもし清ム

かいて をしなへ也 三光との御説は琴を引ニまた初

心の時は手その緒くニ当らず引とくかすして上斗はしる

心なりをしなへと云も凡ソおなし儀也

なに御らんせさせつらん—— 命婦か心也

たいばん所 女の居ところ也

くばやとて は文字清ムくばやとはさあと云事也

た梅の花の色のこと 鼻の事也末むつの鼻赤キ也

三笠の山のをとめ—— みかさの山とうたひ給ふ心は三笠

の神は常陸の鹿島より来り給ふ也末つむは常陸ノ宮ノ

ㄥ (70オ)

ㄥ (70ウ)

下字ヲ擦リ消シタ上ニ書ク。



御女<sup>メ</sup>なるによりてかくうたひ給也

かいねり あかき衣なり

匂へる花 鼻のあかき也

左近の命婦肥後の采女 二人也此人<sup>ノ</sup>ノ鼻赤き歟

心もえすいひしろふ 女とも源の御心中をは知らて不審する也

をも<sup>ノ</sup>しかりし ねんを入<sup>レ</sup>たる也

おほろけならてしいて給へるわさなれば 少<sup>ク</sup>ならてと云心也精を

入て讀給る歌となり

七日の日のせち會 元日七日十六日はを三節會と云

うちの御とのゐる所 桐壺なり

よついたり よのつね也 よなれたり

けさやかに

かしらつきこほれ出たる—— すゑつむの事也

されて さもし濁<sup>ル</sup>

さへつる春はとからうして—— 末摘の卑下の詞也

も<sup>ム</sup>千鳥さへつる春は物ことに改れとも吾そふり行の心也

かたおいにて またをさなき心也

紅はかうなつかしき 是は衣の事也又説々あり

かく心くるしきものをもみていたらで 是は末つむの事也<sup>三光ノ御説也</sup>

花鳥の説はあやまり也

わか御かけの 源氏のかけ也

まろか—— 我と源氏の<sup>ム</sup>給也

かゝる人<sup>ノ</sup> 紫上とすゑつむとの事也草子の地也

「  
(71オ)

「  
(71ウ)

「濁」ノ下擦リ消シノ痕アリ。

(以下九行分空白)

追

櫛をしたられて 女は櫛を髪にさしてゐる物也女の

威儀也

かけても 源は知給ぬ也

いとう書おほせたり――

つふく一字つゝ書たる也

山吹か何ぞ――

女のきぬは雪にあひて 雪にはへて也

なぞ御ひとりゑみ―― 源の御事は勿論の説也又の説は命

婦か独ゑみを余の女房のとかむるとなり

いみしう つようと云心也しゐてなり善悪付て云詞也

但所によりて心かはるへし

筆のしりとするはかせ―― 哥や手跡などの後見也

なかンへきと讀り

いかにそ改めて曳たかへらん時にとそおほしつゝけらるゝ

おひなをりを見出たらん時とおほされてかうし引あけ給り

此詞下にあり是こたへてみればよく聞えたる也

まけてやみにしかなくともし濁へし

女のさうそく今日はよつきたりとみゆるは―― 末つむの今日の

出立の尋常なるは源氏の送り給し衣裳をさながら着し給故也

さもおほしよらす―― 林逸云此一段の詞説多し一源のをくり

給へる衣共の中にかゝる上着も有けるを今見出給へる也たゝ

上ぎの紋のしるき斗それかと思し召たる也是大やうにて面白し

┌ (72才)

┌ (72ウ)

┌ (73才)

一<sup>ニ</sup>へうはき斗すゑ摘の方<sup>ニ</sup>したてられたるをめつらしく思し

めす也源氏ノつかはし給を見給なり又何となくおほしたる也たゝ

上着はかりはみるによきと也

赤からはあえなん さてありなんといふ心也又あやからんと云心也

是もおもしろし 異本あへなん此時はあ<sup>ン</sup>べなんと讀へし

あないとをしかりる人の御行すゑ—— 是は物語の作者ノ

こと葉也末つむの事なり

(以下四行分空白)

ㄥ (73ウ)

### 紅葉賀

此御賀誰ともよく聞えす

朱雀院 是を後の院と云々何れの帝も是院<sup>ニ</sup>御隠

居ある事也延喜ノ次ノ帝より朱雀院ト申一人の御名ニ

なる也冷泉院も同之上古は左もなし先<sup>ニ</sup>も此事註之

おもしろかるへきたひの事なりければ 度也

御かたゝ 女御更衣たちなるへし

あかず 満足せず也

かたちようい人にはことなるを立ならひては花のかた原のみ

山木なり 両方共ニほめて書たり深山木も一かと有て面白し

入かたの日影—— 入日を返すと云舞の手ありよせおもしろく

書たり

ㄥ (74オ)

待とりたる楽 舞いてゝやかて吹いたす楽也

けふの試楽は—— 御門の御詞也

かたても—— 是もおなし御詞也

家の子 公家たちの夏也  
舞のし 伶人とも也

つとめて 異朝の事なり

みたり心地なからこそ こそと云ニ昨日ノ舞の意こもる

あなかしこ 爰にては文なり恐れかましと云心也

御返し 何れもくるしからず

大かたにはと—— 舞か大かたニなきと也

后ことは いまた后にてはおはせねと后ニ成給へき人なれはかく

云り

東宮もおはします 東宮のをは行齋と云也行幸とは申

「(74ウ)

さす 后のをまかくいふなり

御す経 御祈禱なり

いうそく すくれたる輩と云事也

宰相ふたり 左衛門督かけたる宰相右衛門督かけたる

宰相已上二人

垣代 青海波にかきる也

ちりすきて きもし清ム

空のけしきさへみしりかほ—— 天も此奥を知たる

承香殿の御はらの四の御子 誰共見えす やう也

さしつきの—— 源氏にさしつきて也

源氏中将正三位し給ふ頭中将正下のかゝいし給

「(75オ)

位あかり給事也

むかしの世ゆかしけ也 源氏ノ前生也

ことにて 態にしてなり

下字ノ上ニ重ネ書キ。

下ニ擦リ消シノ痕有。

「し」ニ「氏」ト重ネ書キ。

二条院には—— 若紫<sup>卷ノ</sup>の事又爰ニあり

あかぬとおほゆるきすもなし 足らいたる也

まとはし

きこえ給て本かきて—— 三光は本書てとあそはす紹巴は

手本かきてと讀ム三光の御説の如クなればてもし上へ付て讀へし

くし 屈し 苦し 何れにても  
聞八三日 心ぐるしうて

かの御法事 むは君の法事也

御ありさま

三条の宮 藤つほの御里也

命婦中納言中務 藤つほの女房達也

御物かたり

しはく 細々也 数<sup>シベク</sup>

すくくしうて

おほえすをかしき世をもみる哉—— 思はすに源氏の

御かけにかゝると也

大との おほい殿同人也

つこもり 是は大晦日也

まはゆき色 かゝはゆき心也

地のかきりをれる 巴説は地の見えぬほと紋を織を云と

なり 師説は無紋をいふと也 師説とハ三光院殿也

あいぎやうつき

朝拝に—— 是はすゑつむの巻に云ると同支なり

ㄥ  
(75ウ)

ㄥ  
(76オ)

いつしか—— 元日よりと云心也

一よろひ 一双なり

なやらふとて 物の声を高クして悪鬼を止事也節分の

夜の所作也

ことしたにすこし—— 少納言か詞也

あそひにのみ—— 草子の地なり

みしらぬやうに 源氏の方から也

乱れたる—— 源しのくつろきかけ給り

このかみ あねの支をこのかみと云

いとさしもとならばひ給 并<sup>ナラズイ</sup>はもし濁ル あらそひ給ふ

心也 何<sup>ニ</sup>我をと<sup>ム</sup>むと我をたて給ふ也

私玉篇

名たかき御帶 玉<sup>ゴウ</sup>の帯には名物の帯共あり

これは内宴<sup>タマ</sup>なと 源氏の御詞也内宴<sup>ト</sup>云は一段晴

かましき事也平家の代に信西か行なひし後は今<sup>ニ</sup>なし

さんさし 正月の礼なとの様なる事也

内東宮一院 一院は朱雀院也此時の朱雀院は寛

平か陽成院かの内なるへし是<sup>ニ</sup>なすらへてみへし

ねひ給まゝに さかりたつ事也

宮は木丁の—— 藤壺の御事也

この御事の 懷任の夏也

御す法 祈禱の御事也

世中定なき—— 源氏の御心中也又は藤つほの御心と

見てもよし

「(77才)

「(76ウ)

押紙。

弘徽殿などのうけはしけに—— 藤つほの心ニちと我。

ある也 さはやいとはさはやく也験なり給ふ心也

ひとま 人間

人のみたてまつるもあやしかりつるほとん—— 王子を人の

見たてまつる事を也

とかめしや し文字濁レリ

さほ をと讀給り

哥見てもおもふ—— 命婦か見てもおもふと云心也此義前くより

の説なり 師の今案は藤つほの御心を命婦か云るに

みて面白しみぬはたは源氏の御心也此義に落居せり

こやは子を兼たり

命婦をもむかしおほいたりし—— 命は御隔をもし

へし世間はしらぬやうなり

いと佗しく—— 地也

四月に うづきとよみ給

ならひなきとちは—— 無双の形最上とくとは異なる

なきものなるに依て似物とおほしける也 事

いたき出たてまつらせ給て—— 御門御手つからにては有まし

めのとなといたき出奉るへし

中将の君 源氏なり

我御かたにふし給て—— 二条院たるへし

なてしことこなつの おなし物也

哥花にさかなんとおもひ給しも—— わか宿のまきし撫

下ニ擦リ消シノ痕有。

ㄥ (77ウ)

ㄥ (78オ)

子いつの間も花にさかなんよそへてもみん 河海ノ引哥也  
よそへつゝみれと露たになくさますいかにかすへき床  
夏の花 花鳥ノ引哥也されは引歌ニ品二也心のかないたる  
もあり心は不<sub>レ</sub>合して詞はかりのもありいつれの引哥も  
かくのことし素然被仰此哥も心を付てみよ花鳥のは  
心かなふ歎

うとまれぬ 不<sub>レ</sub>ぬ也

例の更なれば いつもの事なればなり

しるしあらしかしと—— 返事はあらしとおほし

たれはなり

しどけなく—— 源の御姿なり

おはしなからとくもわたり—— 内からすくにも御出なき

を恨み給也

いみしうされて——

あなにく—— いつの間にかゝる口すさひをし習給ふ

入ぬる磯と云ニ付てみるめにあくはとの給也いつもみてあくは

悪い事そとなり

えゝむしもはてす

さしやりてゆし給ふ 及<sub>ヒ</sub>こし<sub>ニ</sub>ゆし給ふと云心也

出給へしと—— 何<sub>ク</sub>へやらん御出あらんとなり

めざましき事 目ノ覚る事也驚くやうの心也

いはけて聞るは—— おさなかましく聞ゆると也

けにものけなかりし

┌  
(79才)

┌  
(78ウ)



内にもかゝる人—— 是より直の勅也

心ゆかぬ 合點のなき事也

采女藏人 何れも女官なり采女昔は国々より一人

はかなき事をも—— 源氏に心つよきは誰もなし

試に—— 源内侍の夏を書んとての序也

内侍 一段の好色人なり 内裏にての役人也

そなた そのかた也

御けつりくし 御かみをけつれる歟

御うちきの人 是は男の役也

かはほり 常の扇也 さし扇と云は又女の顔さしかくす扇也

我もたまへる—— 女は扇をはなたぬものなれば源氏

のと取かへ給也

ことしもあれ 事しも也

いつとなく—— いつともなく人かよると也

ひかへて 源氏をひかへて

いまさらなる身の恥に—— 今までに好色の名をえて

てはわか恥といふ心なり かく

せめて いとせめての類也

をよひて 及かゝりてなり

つきせぬこのみ心——

此君も人よりはことなるを 頭中将也

うたてのこのみや 頭中将にもなひくは余りの好色なり

うたてやと也

ㄥ  
(79ウ)

ㄥ  
(80オ)

忍よれば 頭の君なり

温明殿ウシマイテンのあたりを 昔は内侍所内侍所を昔へかしこ所共云ける也愛あり今は別処あり

御前ゴゼンなにとても――

瓜つくりになりやしなまし―― 此口さひ琵琶の上手なれ共

何共似合さるによりて心つきなしとなりなりやし

なましとあるに付て此くちすさひを云歟

かくしうに有けんむかしの人も―― こゝはたゞ女ノう

たを聞ての事斗と心えへし小六かしき説共あり

例にたかひたる 常の女ニへたかふ也

我ひとりしも―― 吾はかりにては有ましと源の仰らるゝ也

哥人妻はあなわつらはし―― 修理か妻ニして通ふ

と聞給也人つまなれば此まやのあたりへはよらしとノ心也

頭中將は此君のいたう実目たち過して―― 此君とは源の

御事也頭の君を常ニもときて吾は実目ノ顔あるをねたきと

すりのかみにこそあらめと 此職のかしらなれば頭と云也大夫とも

頭とも云也

おとなくしき人に 年たけたる人の事也すりのかみの

ことなり

すかし給けるよとて すかすとはたらす吏也

ねんして こらへて也

こほくくと

ねひたれと としよりたれとなり

ㄥ  
(80ウ)

ㄥ  
(81オ)

なよびたる ひもし清り

あか<sup>あ</sup>君く 我君く<sup>も</sup>也

二十のわか人たちの

かうあらぬさまに—— あまりおとし過し給ふニよりて

さてはおとしそと源氏の心え給へる也

おこになりぬ あなづらはしく成れり

まことはうつし心かとよ 現<sup>ウ</sup>心 まことかと也

つゝむめる名やもり—— 右ニ実目たち過してとある

詞ニかゝる頭の君のうた也

うらやみなき—— 互ニうらやまぬ姿也

あらたちし—— 磯を内侍ニよそへ波を頭の君ニよそへたり

頭のきみをよせ付たれは磯に恨あると讀給也

をひは中将のなりけりとわか御なをしよりは色ふかしとみ 給ふに

高位のほと色浅しいつれの色も同夏也

はた やすめ字ニしてもくるしからす

殿の所より是まつとち付させ給へ—— 袖の事なり

たちかへり 哥君にかく—— 内侍をわかものにして君に

とられぬると頭の君のよみ給也

そうしくたす 奏し下す也 上へ申あけ下へ云付る也

なとてか。さしもあらん なとてかと句を切て讀へし

いひ向るくさはひなり 對する心也木といへは竹と云と世俗ノ

云やうなる事也  
やんことなき—— 草子の地なり頭の君の御心中を云也

ㄥ  
(81ウ)

ㄥ  
(82オ)

ことにさりきこえ給へるを 所をく心也  
此君ひとりそ姫君の御ひとつはらなりける 頭君葵ノ

上一腹也

御かとの御子といふはかりにこそあれ 源の御事なり

御なかのいとみこそあやしかりしか 源氏と頭君の御

いとみ也 かもし清

されとうるさくてなん 云心は色々の事あれと事多

ければうるさくて書もらしたると筆者の詞也

七月 ふんつきと讀

御門をりゐさせ給はんの—— 桐つほの御かと也

うたかひなき御位なり 弘徽殿の皇太后宮ニ成給ん

は疑なきと也王子御位ニ即給へは母はやかて皇太后宮ニ成

給ふ事也

廿よ年になり給へる はたとせあまりと讀給へり

まいり給ふ夜 藤壺の始て中宮ニ成て参り給也

宰相の君もつかうまつり給ふ 源氏なりいまた宰相也

そゝろはしきまてなん 飛たつまでと云心也

つきもせぬ—— 不盡なり

(以下五行分空白)

追

すきくしう 三条殿はすきくしう 也足はすき

くしう也清濁少しかはる

女房にまれ 女房にもあれ也

└ (82ウ)

└ (83オ)

└ (83ウ)

ものけなかりしほどを 源氏一向微若なりし程と云  
うち過なま。しけれと 過たけれと也 事也

ほけくしう 清めり

いかさまにむかし結へるちきりにて—— 前世ノ支也

物かたりなとして打ゑみ給る 縁子ノわけもなく聞えず

打うめく事なり

いたき出たてまつらせ給てみ子たち—— 冷泉を桐壺

みかとの抱出給也

そこをのみなんかゝるほどより—— そこをのみとは源の

御事也御門の御心也かゝる程とは冷泉の御ほとくらいよりと

いふ心也

されは思ひわたさるゝにや—— 御兄弟の事なれば似給へると

御門のおもひわたし給也

つれなき人の—— 源氏の御事也内侍か心中ニ頭君を源

氏のかはりニと思へと其頭の君を見たき心は限あり源し

を見まほしき心はかきりなきとの心こもる也

あされたる掛すかた 大掛はかり着て直衣を着給ぬ

姿なり掛は直衣の下にきる物也あされたとはいとけなき也

同事

(白紙)

(白紙)

### 花の宴

此えんも清涼殿にてあり此卷異ニ面白と古人も申傳えたり

也足御説

┐  
(84  
オ)

┐ ┐ ┐  
(85 84 85  
ウ オ ウ)

御つほね

もし給れり もんしとあそはせり是は源氏の御夏也各

分一字

はなしろめるおほかり 鼻白クなる也花鳥ニ委し

御もみちの賀のおり—— 紅葉のかと云事却而此卷にはあり

先の巻にはなし

けしきはかり—— 春鶯囀の末をそと舞給ふ

かゝる事もやと心つかひや—— 兼て用意や有けん也

源氏の君の御をは 御詩をはと云事也

わかかうおもふも 藤壺ノ御心中也 源氏を思ふも也

哥大方に—— 太后ノ此よき人の形をにくみ給ふも如何と云心こ

御心の中なりけん事—— 地なり もる也

かたらふへき戸もさして—— 命婦のゐる所の戸くち也

くるものか 欵にはあらずくるものしやと云心なり

哥おほろけならぬ 少くならぬ也なをさりならぬ也

猶名のりし給へ—— 源の御詞也

いかてかきこゆへき—— いかてか文申承んと云心也

哥うき身世に—— 朧月夜の君の哥也此もの語の中にても読

手也此歌も一段と面白し

しかなとて いつれそとの哥をさして云りこなたも又申し

分ありなんと云心也

すかる給ふか—— すかし給ふか也 たゞし給ふかと也

うへの御局 弘徽殿のつほねなるへし

「 (86ウ) 」

「 (86オ) 」

つきしろひ—— 我<sup>レ</sup>どうしつきほせる也

女御の御おとうとたち—— 女をも弟<sup>アド</sup>と云なり

かやうなるに付ても—— 草子の地也

おくまりたるはやと—— はもし清む

かのありあけ—— 朧月夜の夏也

かくれたちて 見物なんとに忍て立る

いかにぞや そもし清む

みへかさね 上三枚を昏<sup>へ</sup>にて張<sup>へ</sup> 抄<sup>ニ</sup>委<sup>ニ</sup>し花鳥<sup>ニ</sup>

哥よにしらぬ—— 秀逸なり 必<sup>ス</sup>世の字<sup>ニ</sup>非<sup>ス</sup>只名のりを

聞ぬゆへ茫然たる心なり

こしらへむと 機嫌を取んの心也

あかぬ所なく 足はぬ所なく也 悉く足たる也

まさくり くもし濁

めいわうの御よ—— めい王とはよき王ノ御事也

委<sup>テ</sup>しろしめしと<sup>ニ</sup>のへさせ給へるけや けやとは故<sup>ム</sup>也と云心也

源氏の御念入たる故と也

そしうなる物のしとも—— 源の御詞也そしうとは姦む

儀也公界を六かしかりて隠れ居たる上手共を尋出したる斗也

別<sup>ニ</sup>ことに行なふ事もなしと也ことには異<sup>ニ</sup>なり

男もたつね—— 源し也

いつれとしらて 五の君共六の君共しらて也

御もぎ<sup>キ</sup> き文字濁れり

作り給へる殿<sup>ト</sup>を とのと読給也

ㄥ  
(87ウ)

ㄥ  
(87オ)

御子の四位少將を

みことよみ給り如何

哥わか宿の花し——

是は驕たる哥也随分の花そと也

またれてそわたり給

をそく御出也

あされたるおほきみ姿——

大様なりしとけなき也

いつかれ入給へる——

つもし濁て読給り

女一ノ宮女三ノ宮のおはします——

也足の御講には女みこ

たちのおはします——とあそはしたり

如何

ふさはしからず

御心に不<sub>レ</sub>合なり

空たきものいとけふたうくゆりて——

今めかしき事をこのみ

皆くほめぬ詞也

たる——

おほとけたる

手をとらへて

おほろ月夜の君の手也はし近くゐ給へるニよりて

なり心かろくちとしつやかならぬかたなり

歌あつさ弓入さの山に——

かけやみゆるとおもへは又誰共

しらぬなり

忍はぬなるへし

浅心によりてえ堪忍せぬなり

いとうれしきものから

おもしろき書留也

花鳥ニくはし

六君とも慥にはしり給ぬなり

追

廿よひ

はつかあまりと読給也

日ころになれはくしてやあらん

くしてくつして何も

よし同事也

苦ノ字の心なり

假名の上には此等ほとこの事は多ク

ありと素然被仰候

┌  
(88ウ)

┌  
(88オ)

下ニ捺り消シノ疲有。



(以下六行分空白)

(白紙)

┌ (89 才)  
└ (89 ウ)

葵

卷名哥を以て号せり人のかさせるあふひゆへと源内  
侍かよめる也賀茂のまつりの事を詮とする故也弄花ニ  
くはし

世中かはりて—— 桐壺御門御位を去給也源しかたすさふ也  
今きさきは 弘徽殿なり王子御位ニ即給へは母后必皇太

后に成給なり

内にのみ—— 大后の御事也

立ならふ人なう—— 藤つほの御事

折ふしにしたかひては—— 院の御事也

春宮をそ—— 東宮は常に内に御座あるものなれは細々

見給す是はかり御おもひごと也

御うしろみ

かたはらいたき物から 藤つほの御心中也

まことやかの六条の—— 記者の詞也式部也

ことつけて かこつけて也

院にもかゝることなど—— 桐つほのみかと也

世のものとぎ—— とどかぬ事ぞと御教訓あり

かしこまりてまかて給ぬ 恐懼のかほなり

それにつゝみたるさまにもてなして—— それニそのまゝ

┌ (90 才)

随ふ也源氏の心をいふ御息所のけしきニしたかふやうに

こと懸てふかゝらぬを御息所はうらめしく思ひ給也

ふかうもえんじきこえ給す 葵上の御心也

大将の君 源し也

ところ／＼のさしき 院の御さしきなといふ事あり

大殿には—— 葵上はおも／＼しくて常ニ物見なとあまり

このみ給す

おほよそ人 公界の者の事も

大宮 葵上の御母也

よそをしう よそをひしう也

さう／＼の人 雑人なり

なれたる なえたる也下簾也わさと忍給ふ様子也

引入りて 乗やら曳いりて奥ニめす也

かさみ 衣裳ニかさみと云物あり

えしたゝめあへず 制しかねたり

その御かたの人 葵上の御車なれば源しの内ノ者も添奉ル

よいいせんも—— 用捨しかねたり

ひとたまひ てん馬などの類也人に乗せんとて云付らるゝ

車の事も又出車とは同じ変なれとそれは仰付られ

て出す者の方から云る名也いさゝか心もちかはる也

事なりぬ もはやと云事也

つらき人の御前わたり 源しをさして云る也

御ともの人／＼うちかしこまり—— 葵うへの御前をは

「(90ウ)

「(91オ)

91丁折山付近デ紙ヲ継グ。

「ル」ノ字虫損。

礼をしてとをる也

哥影をたに見たらし川のつれなきに—— 御息所ノ哥也源氏は

御知あるましと也それをつれなきにとよめる也

人のみるもはしたなけれと 此人とあるは同車ノ人なるへし四人ほと

は乗もの也

一ところの御ひかりには—— 源の御事也

殿上のそうなとの—— 行幸にも殿上のそうの隨身

なとする事はなけれと源の御威をいはむとてかく書

なしたる也

例はあなからなりや—— 常にはにくけれと今日は道理也

口打すげみて すげんでと読給り 齒のすぎたる也見

にくき口もとなるへし

手をつくりて 此引事は温公を相如ト花鳥に誤れり

式部卿の宮 あさかほの父宮也

姫君はとし比—— 權のひめ君なり

わかき人ノは—— 官女共なるへし

まねび聞ゆる—— 告ヶかたる也

つきノよからぬ人の—— 下ノ人とも也

まうて給りけれと 御息所へ源氏の御出也

さい宮のまたもとの宮におはしませは 御やす所歟又神事歟

花鳥ニ委し

哥はかなしや—— 誰哉らん御同事あるほとに君を待たれ共はか

なひと也

ㄥ (91ウ)

ㄥ (92オ)

ㄥ (92ウ)

しめの内—— 人の領したる源しといふ也 しめの中をある詞ノ

引哥木枯も心して吹しめのうちはちらぬ梢そ大原の山周防内

侍哥也此哥冬ノ祭をよめり

哥なへてあふひを あふひをと云下心なれともあふひと読へし

哥くやしくもかさしける哉—— 実事なきほとに女もくや

しと云也

一日の御ありさまのうるはしかりしに—— かも御楔ノ日は魏ミ

たりしニけふは引かへてくつろき給寐也

つゝまれて 隔心なり

いふかひなきにても御らんしはてんや—— 数ならぬ身をとある

御息所への文のことは也 前房ノ御息所などをかやうニなとは

有ましき事なれと其も取返されぬ事と也

御す法 すもし清給へり

二条院にも時々そわたり給ふさはいへと—— 御中あまり

よくなしとはいへとも也

いきすたま 三光院殿はすもしを清給り紹巴は濁てよめりいかゝ

むねくしからすそ—— 彼是ノものゝけども也

かの殿にはさまでもおほし—— さほととし過とも思給ぬ也

うちとけぬ朝朗 まだ明はなれぬ空也

日比すこし—— 文章也

哥袖ぬるゝ恋ちと—— こひぢとは泥の心をかねたり御

息所の御哥也源氏一部の中ニ一のおもしろき歌と申伝たり

いかにそやも—— 源の御心也

「(93ウ)

「(93オ)

「濁」ノ上ニ「清」ト重ネ書キ。

たけくいかきひたふる心——

タケクイカキヒタフル 猛 辛 永いかきとは

いかる事也ひたふる心とはひたやふりと云て打ふてたる様也

御夢にはかの—— 御息所の夢也

ミヤド 宮人 かやうニよむへし

いみじきたいしにて 大事

白き御そ 産所の衣裳ノ色也

御手をとらへて—— 葵上の御手也

なみたのこほるゝさまを—— 葵ノ御涙なり

何事もいとかうな—— 源の御詞なり

いてあらずや—— いのりふせかれて苦しむ也是は

物のけの云る也

おとゝ宮 兩人也葵ノ御父母なり

その人にもあらず 葵上常ノ躰にもなき也

かくの給へと—— 源の御詞也

宮御ゆもてよせ給へるに 葵ノ御母宮

後の事—— あなゝとの事なるへし

御すほう ヲ、ント読給り此御ノ事前ニも被仰しいつれ

もくるしからず

うふやしなひのもの

クイ 接左伝第二

つふくとの給しこと

いさやきこえまほしき—— こそとて

源ノ御ことは也色く申

度れとも申残すとなり

御ゆまいれ おなし御詞也

ㄥ (94ウ)

ㄥ (94オ)

みんなとにまいりていとゝうまかてなん 源氏葵上に御いと

ま乞の詞也

宮のつとおはするに 葵ノ御母みや

あまりわかくてもてなし給へは—— 余り大事かり給也

花鳥ニ猶あり

秋のつかさめし—— 秋のつかさめしとはおろかなる事なれ共

かく書り本にいはく春ノ司めし秋の司召ト云へき事也春ノ司召トハ  
アカタメシノ事也

みな引つゝき出給ぬ 車ノ事

さうしあへ給す 請しあつめ給ぬ也

さなから二日三日—— さなからとは其まゝ也

たゝならぬ御あたりの—— 御忍ひありきのかた／＼也

人の申ニ随て—— さしならぬ事をも人の申ニしたかひ

てせさせ給へり

かつそこなはれ給ふことゝものあるを—— 死は十四日葬は

廿あまり也 ある上手ノ連哥にけふりともなさてしはしは頼

世に 此心なり

もこよふ たゝよふなり

八月廿ハツキハツカマツリの はつきはつかあまりと読給り

哥のほりぬるけふり—— 源の御哥をしなへての雲迄哀也と  
なり

よをへてうとくはつかしき—— 一生涯の事也

おほすさへ 下の歌ニかけて云り さへ限あれば也

かたはなるをたに 事の足はぬ事をかたほと云ゝ

袖の上の玉 本語なしたゝ手中の玉をうしなふ心欵

ㄥ (95才)

ㄥ (95ウ)

擦り消シノ上ニ「よ」

うしとおもひしみにし——源しノ御心なり  
とのゐの人ノ——葵上の官女共也

菊のけしきはめる——開かゝりたる菊也

聞えぬとは——問ぬとは人の愁かまさらぬ物なれば也問ニ

つらさのまさるなり 又潔斎ニよりての説もあり

哥あはれときくも——菊と云ことをかりて読給り

さた／＼と さたかに也

見きゝけん 物のけの事也

わか心なから猶——えおもひなをすまいと也

にはめる色 にひ色なり

こよなく程へにけるを 文ノことは

さらにおほしゝるらんとてなん 潔斎ノ事よくあたる

是にもときこえ給り 潔斎なればこなたも用捨に存し

てと也

その御かはりにも——前房ノ御かはりニ也

朝夕の露わけ——のゝ宮の躰とも也

其比のやくに——役

三位ノ中将 頭ノ中将を此ニはしめて三位中将と書

をはおとゝ 源内侍か事を異名にしてかくの給也

くまなくいひあらはし——残なく也

しくれ打して——何の日にもあるへし

うすらかに 服衣の色のこと也

女にては——三位中将の心中

「(96才)」

「(96ウ)」

いとあはれなるまみに—— 涙くみたる躰也

哥雨となり時雨る—— 三位中将の哥也

みし人の雨と—— 雨と有て又時雨とありむかしはさも

こそ当代かやうには読ましきと素然被仰候

ゐたちて 居立

大宮 源しの御をは也

いとをしう見ゆる—— いたかりけり 是は頭の君ノ心也

草かれの籬に—— 草枯は大宮なてしこは夕霧別し

秋は葵上ニたとへてよみ給り

哥かきは荒にし—— あふひの上に比す

たえま遠けれと 久しく音信なき事也

さの物 さうのもの也

御手なと—— 僅や御息所へは源氏御手をもたしなみてあ

そはせり恥給ふ也

哥秋霧に立をくれ—— 葵上の事をそのまゝ読給り

見まさりはかたき世なめるを つれなき故かみまさると也

たいの姫きみ 紫上の事

めおや 母義也

あはれなる御心哉と見たてまつる 中納言ノ心也

名残なくは—— 後ニ御出あるましい也

ちいさきわらは 葵上殊ニ御めを懸られしあてきといふ小

女也

ほとなきあこめ あこめは衣類也ほとなきとは小サキ事也

—  
(97ウ)

—  
(97オ)



ちいさき衣也

きはく 差別也 ほとくニ也

君はかくても 源し也

御前

ひまありつる袖 少し干たる袖也

かしこにて待きこえん かしことは二条院也

けふにしもとちむましき 今日ニ限ましい也

聞えさせんも中く 聞えさせんとも云上にさあるに

付てもといふ事を心中ニをきてみるへし

御袖もひきはなち給はす おとくノ御目に袖をはなち給ぬ也

又一説は源氏の御袖をおとくの引えてはなち給はぬなり

齡のつもりには おとくの詞也

せめておもひしつめて 随分く思しつめて申給也

世のさか 爰にては世のならひと云心なり

思しすつましき人 夕きりの御事也

御目かる かもし清ム

いま御らんしてん 今にとみるへし

うつせみのむなしき心ちそし給ふ かたはかりの古跡也

かしこの御手や おとくのことは也

餘所人に 草子の地なり

かれてましれり 手ならひの帯の中ニあり

そろさむぎ夕の 身の毛だつ也

命婦の君して 藤つほより

〔98ウ〕

〔98オ〕

常なき世は—— 源しの御返事

けふまでもとて—— 世を捨給ぬ事也

ゑいまき給へる 卷纓の事也

東宮にも久しく—— 此由藤つほへ聞え給へと申置て帰

給ふ也

衣かへの御しつらひ 十月の衣かへなるへし

ちいさき御木帳 座しきの中ニたつる木帖は小さき物也

あかぬ所なし 足はぬ所なし十分ニ足たる御かたち也

こと方に—— 東ノ對欵

やんことなき御忍ところ—— 草子の地也

へんつき 文字の篇也 篇書ヘンギキの事也

あい行つき

君はわたり給とて わか御かたへ

あさましようおほさる 紫の御心也

こなたはかりに—— 紫上はかりニまいる

心とき物にてふとおもひよりぬ 惟光三日ノ夜の祝と思よる也

手つからといふばかり—— 馳走仕る様躰なりばかりはほど也

君はこしらへ侘て 紫上の機嫌を取わひ給て也

かうこの箱 こもし濁ケツル

花足 墓のあし也

うち／＼にの給はせよかしな—— 少納言か心中也内々にて

吾ニ仰付られ。かしといたはりて思ふ也

おほしは。たす 源氏のおほしはなたす

ㄥ (99才)

ㄥ (99ウ)

御もき

御かたに入給へれば 葵上の御かた也

みそかけ 　　そもし清<sup>ム</sup> 衣桁ノ事也 柁架<sup>延喜式</sup>

やつれさせ給へとて 此衣裳をめてやつれさせ給へと卑下の

御詞なり 悪<sup>キ</sup>衣裳と被<sup>ル</sup>仰御ことは也

おろかなるへき事にぞあらぬや おろかに有らう事

にてはないと云心也 草子の地なり

(以下八行分空白)

追

髪ひきこめたる 髪なとさけたる其上に衣裳きたる

私当代かつきたる姿か

躰也

やんこと方<sup>ニ</sup>いと心さしそひ給へき事おきたれば 葵上ノ

懐胎ノ事也

平かにもはたと打おほしけり

はたはやすめ字也 将<sup>ハタ</sup>

前の世を思ひやりつゝなんさまし侍るを—— 思ひさます也

今きさきはみくしけ殿猶この大将にのみ心つけ給へるをけにはた

かくやんことなかりつるかたもうせ給ぬめるをさてもあらんに

なとかくちおしからんなどとおとゝのゝ給に いま後は弘徽殿也

みくしけとのは朧月夜ノ内侍也大将は源也おとゝは御父の臣也

いとにくしと—— はけむとあるまで今后ノ心也六かしき処<sup>ヲトビ</sup>

よくく心<sup>ヲ</sup>を付て見へし

御あしなんとまいり—— 中納言源の御足<sup>ヲ</sup>さする也

あなかしこあたに—— あたに口きくなと云り 忍てまいら

└  
(101ウ)

└  
(100ウ)

└  
(100オ)

せ給へとある詞にこたへり

さるもじいませ給へ—— あたと云文字の事也又一説アリ

よもましり侍らしといふ あたと云事は詞ニよも申さし

となり

うたて所せうも有哉いかに生哉らんとすらん 所せうとは髪フイの長

くあつき事也 髪ををしみ給也

猶やう／＼心つよく—— 源の御詞也葵ノはゝ宮へ仰らるゝ也

おまし所ニこそと云て句を切て見へし座所より常ノ御座

処へ御くつろきあれと也 余りわかくしとはおさなき

者なとをあつかふ様にさせらるゝは却て如何と源氏の仰らるゝ也

かたへは 諸カタ多ノ心也 傍ク片枝 所ニよりて意かはるへし

御心まとひともおそろしきまてみえ給ふ 此おそろしきは恐

怖ノ事也

(以下五行分空白)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

└ (101ウ)

└ (101ウ)

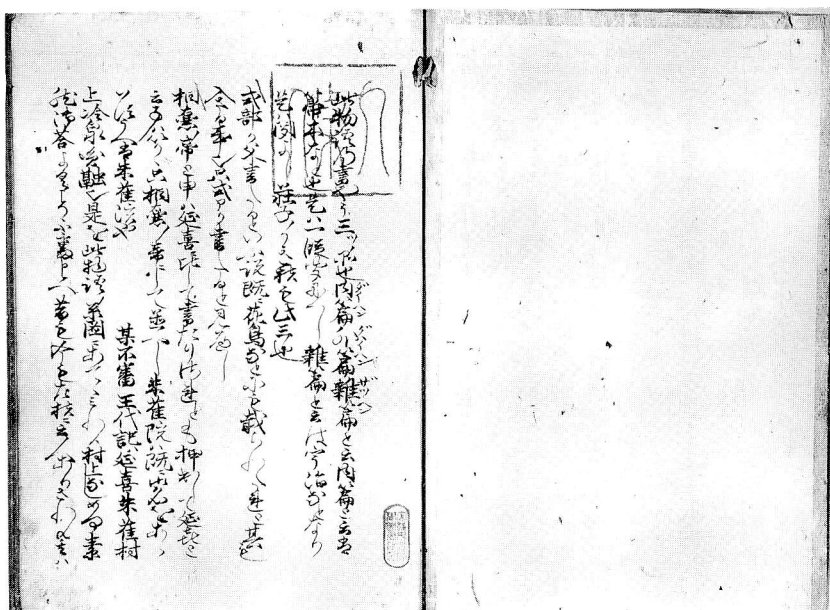
└ (102オ)

└ (102ウ)

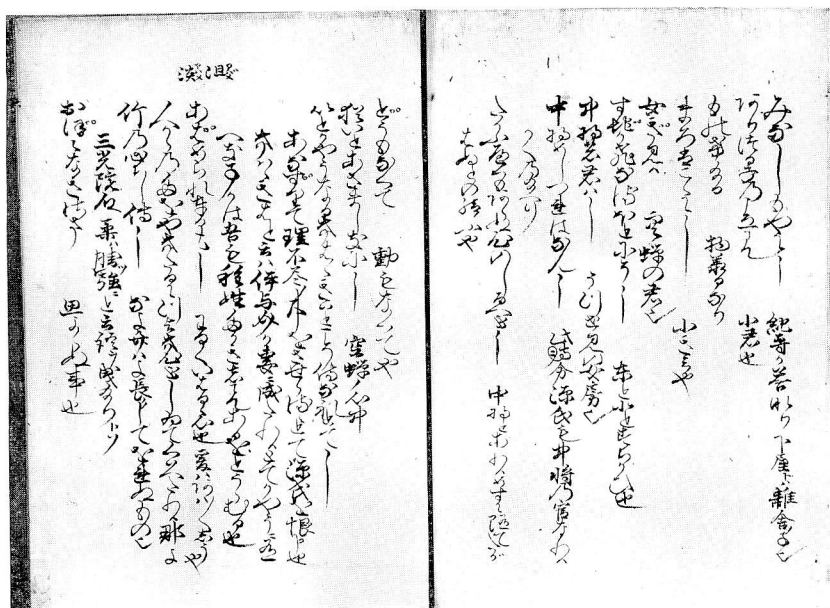
└ (見返し)

└ (裏表紙)

左下ニ「実践女子大学図書館印」  
 (庫印)「(単辺朱長方内印)」「常磐松文  
 庫印」(単辺朱長方角印)ヲ捺  
 「月明莊」(単辺朱長方角印)  
 捺ス。



「九条家本源氏物語聞書」第一冊（1オ）



「九条家本源氏物語聞書」第一冊（27ウ・28オ）

是の如く言ふを以て其の如く  
 むくまの事なりゆきなり  
 何れ海にひまの事なり  
 今に見た事なり  
 此の如く言ふを以て其の如く  
 今に見た事なり  
 今に見た事なり  
 今に見た事なり

未摘 慶名九月方熟無石狀素然

[illegible]